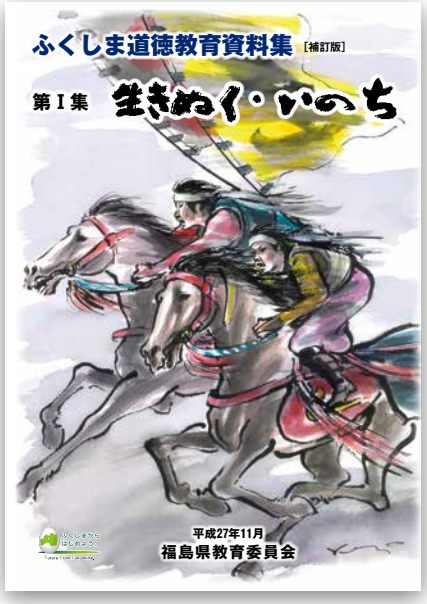
ふくしま道徳教育資料集

【中学校版】



Future
From
Fukushima.
ふくしまから
はじめよう。

福島県教育委員会

この本を手にとったみなさんへ

かけがえのない命をもつみなさん。
家族や友達、先生、
さらに多くの人とのつながりの中で、
みなさんは、生きています。
ここ福島で、今、時を過ごしているみなさんは、
この本から何を受けとめるでしょうか。
この本を読んで感じたことや、
そこから生まれた問い、思いを、
話し合ってみましょう。
今を共に生きる人と話し合うことで、
見えてくるものが、きっとあることでしょう。

福島県教育庁義務教育課長
佐藤 秀美

目　次

(1) いま新しき力あふれて……4
(2) 温かさを分け合って……8
(3) 大切なひと……12
(4) よみがえれ！　安波祭……16
(5) ヒューストン日本語補習校だより……20
(6) 塩むすび……24
(7) ありがとうの唄……28
(8) 五〇〇人の大家族……32
(9) 手渡されたパン……36
(10) この町のために……40
(11) 仮校舎……44
(12) たった一秒の「ありがとう」……48
(13) 紫紺の襷……52
(14) 家路……56
(15) 海へ……62
(16) あこがれの消防団……66
(17) When in Rome, do as the Romans do.……70
(18) 墓印（はかじるし）……74
(19) 命のおにぎり……78
(20) 水道部隊の軌跡……82
(21) それでも僕は桃を買う……88

「モラル・エッセイ」コンテスト作品集……93

ふくしま道徳教育資料集

【中学校版】

いま新しき力あふれて

二〇一一年（平成二十三年）三月十一日金曜日、午後二時四十六分は、卒業式の余韻が残る時間だった。

ぼくたちは、今まで体験したことのない巨大地震に襲われた。マグニチュード九という観測史上世界四番目の規模の大地震である。幸い僕の家は、本棚からCDが少し落ちた程度で大丈夫だったが、停電のため、暗い夜を過ごすことになった。

その夜、ラジオ、ローソク、懐中電灯、ランタン……。暖をとるためにも明かりをとるためにもありとあらゆるものが頼りだった。ぼくは生まれてはじめて感じる電気のない不便さ、そして情報のない不安を味わうことになった。

その夜は、親子四人で同じ部屋に布団を並べて寝た。遠くから、「ゴォー。」という音が聞こえてくると、その直後大きな揺れの余震が何度も起きる。

「学校のみんなは大丈夫なのかな。学校には行けるのかな。」と考えると、ぼくは、なかなか眠れなかった。

翌朝、両親とともに車で様子を見に学校に向かった。

N中の校舎や体育館は見る影もなかった。壁のあちこちには、大きなひび割れが縦、横、斜めに走り、校舎の下の地盤は沈んでいて、亀裂が入り、学校は悲鳴をあげているようだった。

目の前の信じられない光景に、思わず声を上げた。

「こんなことがあっていいのだろうか。これからどうなるんだろう……。」

そして、原子力発電所の爆発事故が起きたのだ。

その日から学校は休校になり、仲間とも会えなくなった。しばらく校舎に近づかないようにとの連絡もあった。放射性物質が飛散したことは、ぼくたちから校舎だけでなく、校庭やグランドも奪い去ってしまった。そして休みの間は、友人や野球部の仲間のことが気になり、落ち着かない日々が続いた。テレビでは毎日のように、原発事故の情報が流れるようになった。

二重にも三重にも自由を奪われ、言葉にできない不安な日々が過ぎていった。

四月になり、N中は、地区の公民館で再開された。

それからしばらくして、多くの人々の協力により、仮設の校舎ができて、新しい学校生活がスタートした。フロアを仕切り、机や椅子を置いて教室を作った。仮設の教室は、隣の教室の声が聞こえ、初夏を迎える頃には、ものすごい暑さになった。また、体育の授業は、バスで移動して隣町の体育館を借りて行われた。理科の実験や技術・家庭の実習、部活動も場所や活動時間が制限された。以前のような野球部の練習はできなかったが、僕たちは励まし合って欠かさず筋トレを続けることにした。

そんな中、ぼくたちの旧N中校舎の取り壊しが決まった。全校集会で校長先生から、この決定の報告とともに、百歳の現役医師の日野原重明先生の言葉が紹介された。

「命は、きみたちがもっている時間です。

血液を動かす心臓も大切、考えることのできる脳も大切です。
でも命そのものは、それを「使える時間」です。
そして、寿命とは生きている時間ではなくて、使える時間のことです。
使える時間をどう使うか考えることが、生きるということなのです。」

そうだ。僕たちには「命」がある。「使える時間」がある。そう思えたとき、僕の中で何かが動き始めた。
それまで、校舎が古くて不満を感じていたこともあった。でも、何よりもまた、こうして仲間と一緒に過ごせる場があり、勉強や部活動ができる場所があることの尊さに気がついた。
今回の震災では多くの命が失われた。未だ行方不明の方々も数多くいると聞く。家、職場、学校等を失った人たちの中には、今なお過酷な避難生活を送っている人たちもたくさんいる。
だからこそ、今までいやいややっていた活動や、面倒くさいと思っていた勉強がとても愛おしく感じられたのだ。

今は校庭に建てられたプレハブの仮設校舎で学んでいる。二学期からは実験や実習の授業も少しずつできるようになってきた。そして、通常に近い学校生活を取り戻しながら、新しい校舎建設の準備も始まった。
屋外活動が制限される中ではあったが、野球部の活動も徐々に以前の練習メニューをこなすことができるようになってい

た。限られた時間の中で、集中して取り組んだ結果、三年の先輩は、中体連県北地区大会で第三位という好成績を収めることができた。ぼくたち一・二年生のチームも、中体連新人戦大会での支部大会で優勝し、県北地区大会でも第三位となった。

N中では、野球部だけでなく他の部も頑張り、素晴らしい成績を収めることができた。みんなが『N中魂』を見せてくれたのだ。こんな状況だからこそ、N中生一人一人が、校歌にうたわれるように「いま新しき力あふれて」、希望に向かって頑張っていると信じている。

ぼくたちは、与えられた時間を夢中で駆け抜けてきた。そして、今、活気に満ちた学校が取り戻されつつあることを誰もが感じていると思うのだ。

（「教材作成委員会」作成）

温かさを分け合って

「みっちー」。それが、新しい学校でのぼくのニックネームとなった。四か月足らずの生活だったが、ぼくに色々なことを教えてくれた大切な日々だった。

あの三月十一日の東日本大震災は、ぼくたちの生活を一変させた。

南相馬市は原発の影響で屋内退避となり、生活面や健康面など様々なことを心配した両親は、祖父母とぼくたち兄弟を連れて埼玉の伯父の家に一時的に避難することにした。

伯父の家に着いても、両親は仕事があるため、早々に南相馬市に帰り、祖父母とぼくたち兄弟だけが埼玉に残ることになった。いつまで続くかわからない避難生活、両親の不在、そしてあまりにも急な転校の話にぼくは戸惑い、とても不安だった。

いつもは強気な小学生の弟も、心細そうにぼくにくっついていることが増えた。初めて過ごす伯父の家、初めての町、慣れないことばかりの生活が始まった。

そして、転校初日。これからの学生生活がどうなるのか不安に思っていたぼくにとって、「みっちー」というニックネームは思いがけないものだった。初めてなのに、親しく声をかけ色々と教えてくれる級友にぼくはとても安心した。埼玉の学校でも頑張ろう、という気持ちがわいてきた。

そんなある日、ぼくは新聞を見て驚いた。福島から来た小学生が、転校先で「放射能がうつる」と言われたというのだ。さらに、病院で診察を断られる、レストランの入店を拒否される、スクリーニング検査を受けた証明がないと入れない施設がある、いわきナンバーの車がパンクさせられるなど、放射能による差別があちこちで報道されるようになった。同じ福島県内ですら、浜通りから来た人に対して「放射能が来た」と言ったという話を聞いた時は、耳を疑った。

どうして、こんな差別をする人たちがいるのだろう。放射能差別とでもいうべきニュースを見るたびに、ぼくは怒りと共にとても悲しい気持ちになった。それを両親に話すと、「四月に入ってからは、食料やガソリンなどを積んだトラックが仙台まではよく来るようになったよ。でも、『放射性物質で汚染されるから、南相馬市まで運びたくない。』と言っている人もいるね。何とかお願いして相馬市まで運んでくれても、そこから先は危険だから行きたくないという人は、やっぱりいるんだよ。目に見えないから心配なんだね。」と話してくれた。食料がなければ店も開かず、食べるものが手に入らない。軽油がなければがれきをどかす重機も使えない。地震や津波の被害をまぬかれ、町を何とかしようと思っている人たちはたくさんいたが、生活することが難しくなり、町を離れる人は後をたたなかったそうだ。

また、警戒区域では行方不明の家族すら探せない、遺体が見つかっても放射性物質などの関係で家族でも触れることができなかったという。それがどれほどつらいことか、ぼくには想像もつかない。八月が終わろうとする今も、田んぼには漁船が転がり、がれきは集められたものの、あちこちに積み上げられたままだ。震災は当たり前と思っていた景色も生活も、すっかり変えてしまった。

ぼくは、これまで人権についてあまり考えたことがなかった。しかし、震災後の生活を振り返って、震災以前の当たり前と思っていた生活がどれほど大切なものなのか、ぼくたちを守ってくれていたものがどれほどたくさんあったのかに気づかされた。

家族と一緒に暮らすこと。学校に行って勉強したり、校庭で思い切り体を動かしたりすること。公園の芝生の上に寝転がること。原発の事故で差別されないこと。震災という出来事が、これほどたくさんの「人権」に関わってくるようになるとは思いもしなかった。

千年に一度の大津波。起こることを想定していなかった原発問題。自然の驚異や科学技術の進歩によって、これから先も色々なことが起こるだろう。困っている人、大変な思いをする人がたくさんいる中で、全ての人権を守るのは、とても難しいことが今回の震災でわかった。しかし、だからこそ、放射能による差別や風評被害など人を傷つけるような問題は起こってほしくないと思う。震災以降差別に関する残念なニュースは多かったが、それ以上に心が温かくなる話の方が多かった。大変な時だからこそ、助け合うことが大切

であることを、ぼくはこの震災を通して学んだ。たくさんの人に支えられて、ぼくたちは生きている。そのことを忘れなければ、人を傷つける言葉や相手を考えない言動をとることはないと思う。

「みっちー」と温かく迎えてくれた埼玉の友人たち、不安をなくすために温かい言葉をかけてくれた先生方を、ぼくは絶対忘れない。そして、大変な中でも普通の生活に戻そうと工夫してきた原町二中のみんなや先生方の強さも。ぼくもその温かさを他の人に分けられる人間になりたいし、どんなことがあっても強く生きていく心を持てる人になろうと強く思う。

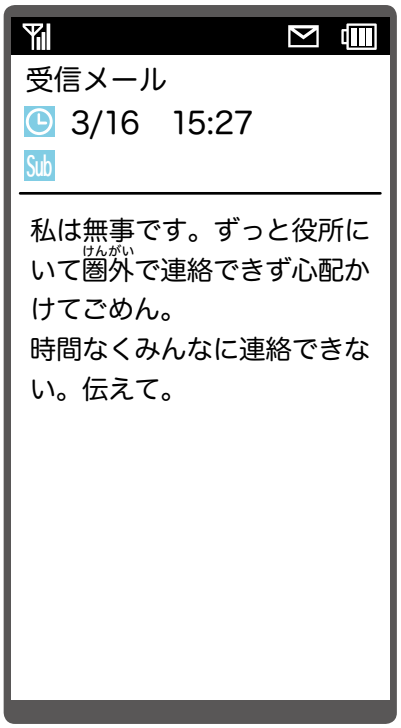
（「平成二十三年度第三十一回全国中学生人権作文コンテスト」生徒作文）

大切なひと

私のもとに一通のメールが届いた。

宮城県石巻市役所で働いている友人からのメールだった。震災直後から彼女との連絡が取れない日々が続いていた。

一向につながらない携帯電話、テレビで繰り返し流れる石巻市の悲惨な映像に、彼女の最悪の事態が頭をよぎっていたところだった。



私は、勤務している中学校の廊下にたたずみ、何度も何度も読み返した。涙があとからあとからあふれてきて止まらなかった。

この頃、福島では混乱が続いていた。原発事故の状況が悪化する中、水やガソリンを求めて、あちらこちらで行列ができていた。

そんな折、彼女からの二通めのメールが届いた。

受信メール
3/25 21:30
Sub 心配かけてごめん

今日、家に帰ることができたので、被害がひどかった地域を歩いてみました。そこはまるで空爆を受けたように瓦礫が積み重なり、何もなくなっていました。
亡くなってしまった同僚やその家族、まだ行方が分からない人たち。日を追うごとに聞こえてくる話はあまりにも惨めすぎるけれど、全部受け止めて進んでいかなきゃいけないのだと思います。
福島の状況も心配です。体に留意して下さい。

追伸：二週間ぶりにお風呂に入りました。人も脱皮するみたいです。

彼女は福島県出身だ。実家は原発から三十一キロ地点にあったので、ふるさとのことも家族のことも殊の外心配だったに違いない。

彼女のメールには、壮絶な経験をしながらも泣き言はなかった。私は、友人に対してこれまで見たことのない強さを感じていた。

その一方で、不安ばかりを口にしていた自分が恥ずかしかった。私も目の前の生徒のためにできることを精一杯していこうと心を決めた。

それからひと月が経った頃、彼女からメールが届いた。

受信メール
4/30 19:52
Sub ５０日間

電気があると夜が不安じゃなくなることや、トイレで手を洗えること、街に街灯や信号が復活して明るくなったこと、身内を亡くし、気丈に振る舞う人にただ寄り添うしかできない無力感、いろんなことを感じた。その一瞬一瞬を私はこの先、絶対忘れないと思う。
それより福島の方は？宮城や岩手は復興に向けて動いているけれど、福島はまだその状況ではないよね。子どもたちを預かる先生の立場上、心配ごとも多かろうと思います。立場は違うけれど、お互い踏ん張ろう！

このメールの後、私は彼女に会いに行こうと心に決めた。

ガタガタの東北道を走って石巻市にたどり着くと、市内は、目を疑うような光景が広がっていた。津波で流され、民家に突っ込んでいる車や、炎が上がった地域では家々が黒く焦げていた。無数の車や家屋に「捜索済（中に人はいないという意味）」の貼り紙が貼られていた。待ち合わせの場所で互いの姿を確認すると、走って行って抱き合いながら互いの無事を喜んだ。彼女の笑顔に、心からほっとした。

震災直後から、彼女は、混乱した現場で必死に市民の対応に当たっていたそうだ。避難所の市民に最初の食料が行き渡るまで三日間。その間、彼女が口にできたのは、机の引き出しの中にあったあめ玉だけだったそうだ。そして最初のメールは、バスの運転手から「途中五分ほど電波の届きやすいところを通ります。連絡したい人がいたら、今のうちにメールの文面を作っておいてください。」と言われて、やっとの思いで送ったものだった。

私は、思わず最初のメールを読み返した。そして声を出して泣いてしまった。

その日の夜、視界が様変わりした。照明が津波で全部流されたために、海と陸との区別がつかない暗闇が

広がった。

「こんな状況の中で頑張ってきたんだ。」

彼女の今日までのことを思うと、私は胸がいっぱいになった。彼女は、私にとって今まで以上に大切なひとになっていた。石巻市を訪れ、彼女に会えたことは、私にとって確実に大きな力を与えてくれたからだ。

その後、転勤があり、私には新しい生徒との出会いがあった。新しい学校には、避難してきた生徒がいる。これまで頑張った生徒たち。今なお頑張っている生徒たち。

私の「大切なひと」である彼女への思いを重ねながら踏ん張った毎日を思いだし、今度はこの子どもたちと踏ん張ろう。

震災から半年が経過した十月、彼女からメールが届いた。

受信メール
10/8 18:56
Sub いま思うこと

同い年の同僚が震災による火事で亡くなりました。今までいた人が突然いなくなるということは、あの震災以来、有り得ないことではなく、私たちは生かされているんだなと思うようになったよ。
今一番強く思うことは、いつ何があってもおかしくない毎日だから、人と別れるときには、できるだけ名残がないように「ありがとう」とか「ごめんなさい」とかちゃんと言うことは言って別れなきゃならないなと感じます、強く。
一人では何にもできない私だけど、自分の役割をちゃんと見つけて生きていきたいです。

（「教材作成委員会」作成）

よみがえれ！　安波祭

それは、一枚の写真を欲しがったしげさんの思いから始まった。

「安波祭の写真をお持ちの方、どうか譲っていただけませんか。津波で流されてしまって何も残っておりません。私のふるさと請戸の祭りの写真です。」

しげさんの想いは、やがて新聞にも取り上げられ、多くの人々からしげさんのもとに、写真が集まった。写真は、その後、祭りを復活させよう、請戸を復興させようという思いにつながっていった。

私が安波祭の田植踊りに参加したいと思ったきっかけは、離ればなれになった友達に会えるという気持ちからだった。避難先の学校には、もとの学校の三分の一しか友達がいない。仲のよかった尚ちゃんは東京に転校し、彩ちゃんは二本松市の仮設住宅から学校に通っている。私は、郡山の叔母の家から新しい中学校に通い始めた。

しげさんが二本松で田植踊りに参加する子どもを探していると聞いたとき、私の心は、「みんなに会いたい。」という思いでいっぱいだった。お祭りは、どこでやろうと構わない。また、みんなに会える。彩ちゃんに会いたい。そのことが私にとっては大切なことだった。

もちろん、新しい学校で友達もできた。ただ、時々何かが足りないと思う。いつも波の音を聞いて育ったからかも知れない。請戸を出たあの日から、やっぱり何かが違う。なんで請戸には帰れないんだろう。

安波祭
双葉郡浪江町請戸に伝わる祭り。

田植踊りの役は三つある。まず太鼓(たいこ)たたきの「中(①なか)ぶち」である。音でみんなをリードする、いわば、音頭(おんど)取りである。

花笠に赤い着物を着るのは、「早乙女(②さおとめ)」と呼ばれる女性役。参加する子どもの中でも小さい子の役だ。手ぬぐいではちまき姿の「才蔵(③さいぞう)」は、力仕事を得意とする男性役。だから大きいお姉さんたちが役をになう。

練習会の前日、私はなかなか眠(ねむ)れなかった。二本松市の仮設住宅にいる彩ちゃんと会うのは半年ぶりだ。話すことがいっぱいある。しげさんの話だと、彩ちゃんは中ぶちを希望しているらしい。私も太鼓たたこうかな。彩ちゃんとなら息も合うはずだ。

練習会の朝、予定より早く公民館に着いた私は、子どもたちの輪から少し離(はな)れたところに彩ちゃんを見つけて駆け出そうとしてはっとした。

少し背が伸(の)びた彩ちゃんが、困ったような顔をして立っていた。

「彩ちゃん、元気だった。」

「うん。」

「部活、何に入ったの。」

「入ってない。」

話は弾まなかった。私の知っている彩ちゃんじゃないみたいだ。

彩ちゃんは、津波でおばあちゃんと家を失った。あんなに大好きだったおばあちゃんが亡くなったんだもの。彩ちゃん、私に何ができるだろう。

「中ぶちを引き受けてくれた彩と佳奈(かな)。こっち来て太鼓持ってみな。」

気まずい二人を取り持ってくれたのは、保存会長のしのじいだった。

① 中ぶち

② 早乙女

③ 才蔵

「そうか。そうか。赤い着物で踊っていた彩と佳奈が中ぶちに昇進とは、しのじいも年をとるわけだ。」

私は、彩ちゃんと話せないもどかしさをしのじいにぶつけてみた。

「安波祭は港の祭りだったんでしょ。請戸でやらないと意味がないんじゃないの。」

「そうだな。しのじいも昔はそこにこだわっていた。だけど、今は少し違うんだ。堤防作って津波に備えてはいたけれど、結局は役に立たなかった。」

十八歳で漁師になったしのじいが、遠くを見ながら言葉を続ける。

「請戸の海岸は、春は穏やかだが、秋ともなれば、怒とう②のごとく、波が白い牙となって砂浜に押し寄せる。安波祭は、もともとは海を鎮める漁師の祭りだった。だから船方③以外は参加できない祭りだったんだよ。」

しのじいの話によると、海上の安全と豊漁・豊作を祈る安波祭は二度、中断の危機に見舞われている。一度目は、祭りをつかさどる漁師たちの生活の変化によるものだった。一年の半分は漁に出て、半分は耕作する生活が、祭りを時代とともに変えていった。そして祭りをつかさどった船方衆から、町の青年会に所属する若者へと変わっていった。

二度目は、町に残る若者も時代とともに少なくなって、田植踊りの踊り手が消えかけたときだ。祭りをつかさどる若者がいない。この事態に保存会は、田植踊りを絶やさないために、踊り手を女性や子どもたちに引き継いだ。豊漁と豊作を祈る祭りは、いつしか若者から子どもに託され、途切れることなく続いているという。

② 荒れ狂う大波。激しい勢いで押し寄せる様子のたとえ。

③ 船に乗って働く人。船乗り。

彩ちゃんがぽつりと言った。

「しのじい、そんな大切なお祭りなのに、私でも役に立てるのかな。」

「ああ。安波祭はどんな困難も乗り越(こ)えて千年以上も受け継がれてきた祭りなんだよ。祈りはどこにいたって通じるもんさ。さて、彩と佳奈は、何を願いながら踊ってくれるのかな。」

しのじいの言葉に私たちは大きくうなずいた。さっきまでの彩ちゃんの不安な表情は消えていた。

「佳奈、さっきはごめん。」

「彩ちゃん、佳奈には遠慮しないでね。」

「新しい生活で、自分に負けそうだった……。」

そういって、彩ちゃんは涙ぐんだ。

「佳奈は彩ちゃんに負けないからね。だから、彩ちゃんも佳奈に負けないで。そうしたら、きっと二人とも強くなる。」

「本当だ。」

彩ちゃんが笑った。

「彩と佳奈もこっちへおいで。衣装を合わせてあげるから。」

しげさんの甲高(かんだか)い声が響く。

「佳奈、私、負けないよ。」

勢いよく走り出す彩ちゃんの背中を追って、思わず私も駆(か)け出した。

（「教材作成委員会」作成）

ヒューストン日本語補習校だより

中学一年生のぼくは、父の転勤でヒューストンにやって来た。小学校時代の友達は、日本での楽しい中学校生活を手紙に書いて送ってくれる。それが羨ましいぼくは、なかなか返事を書く気になれずにいた。

三月十一日は晴れていた。ぼくが、東日本大震災のことを知ったのは、テレビのニュースからだった。ぼくの目に飛び込んできた映像は、映画の世界のようで衝撃的だった。特に福島は、原発の事故が追い打ちをかけていた。

「日本は、福島は、大丈夫なのだろうか。」

一週間後、①中学部と高等部の生徒が中心となって義援金活動を始めることになった。ぼくは内心、募金はそんなに集まらないのではないかと思っていた。

準備が進み、募金活動の初日。ぼくは、おこづかいの中から一ドルを持って、急いで学校へ向かった。昇降口では、中学部の中島くんが一所懸命に募金を呼びかけている。校地内では、送迎する保護者の車を洗っている生徒もいた。

「なんで朝から車なんか洗っているんだろう。」

よく見ると、高等部の先輩は、道行く人にチョコレート菓子を売っている。

ぼくは、昇降口でとりあえず一ドルを募金して、教室に向かった。後か

ヒューストン日本語補習校
テキサス州ヒューストンにある、日本人に対して国語等の内容を土曜日に補習授業として行う学校。全日制の日本人学校とは異なる。

① 日本の中学校・高等学校のこと

ら分かったことだが、中学部と高等部の生徒は、みんな働いてお金をもらい、そのお金を募金していたらしい。ぼくは驚いた。何もせずにお金だけ持ってきて募金をしたぼくは、何だかきまりが悪かった。

翌週も募金活動は続いた。まだ、友達らしい友達がいないぼくは、車を洗ってお金をもらい、そのお金を募金する活動に参加できずにいた。

一歩が踏み出せない。

「ぼくもやるよ！」

のひと言が言えないのだ。ぼくは、そそくさと募金箱に一ドルと今朝カバンの中から見つけた五十円玉を入れて、昇降口で振り返った。楽しそうに車を洗う友達の姿がまぶしく見える。思わずため息が出た。

すると、ぼくの後ろから校長先生の声が聞こえた。

「君はやらないのか。遠慮するなよ。よいことは、堂々とやればいいんだよ。」

ぼくは、何か自分の胸の中にあったもやもやしたものが、すっと消えていくような気がして、慌てて校長先生に会釈した。

次の土曜日、ぼくは、今日こそは車を洗おうと決めていた。しかし、「ぼくもやるよ。」のひと言がどうしても言えない。

そのときだ。送迎で来ているお母さんに声をかけられた。

「私の車もお願いできないかしら。」

ぼくは思わず、「少し、少し、待っていただけますか。」と答えると、思わずみんなのところに駆け出した。

それからは夢中だった。助けを求めるぼくに、みんなは喜んで手伝って

くれた。おまけに中島くんは「ミノルが初めて請け負ったお客さんの車だよ。」と紹介したから、みんなはおおいに張り切ってた。

ぼくの気持ちとは裏腹に、喜んで協力してくれたのだ。

ぼくは、びしょびしょになりながら車を洗った。はじめは照れくさかったが、やってみると面白い。そして、少しずつ慣れてきて、車がぴかぴかになる頃にはすっかり楽しくなった。今まであまり話したことがなかった友達とも、自然に話すことができた。そして、洗車が終わると、友達のお母さんはニコニコしてぼくに二ドルを手渡した。二ドルはぼくの手の中で重たかった。

ぼくは初めて自分で稼いだお金を募金した。そして、やっとぼくもヒューストン日本語補習校の一員になれたような気がした。

学校だよりに掲載された募金額の合計は、三千二百七十六ドル十六セント（日本円にして約二十六万円）と五十円。おまけのように記された五十円玉は、ぼくの入れたものだった。

あの時の校長先生のひと言が耳に残っている。

「よいことは、堂々とやればいいんだよ。」

気がつくと土曜日が待ち遠しい自分がいた。そうだ。日本に手紙を書こう。このことを日本で頑張っている友達にも報告しようと思う。ぼくのヒューストン日本語補習校だよりとして。

（「教材作成委員会」作成）

平成23（2011）年８月６日第99号

学校だより

ヒューストン日本語補習校
Japanese Educational Institute of Houston
12651 Briar Forest Drive, Suite 105, Houston, Texas 77077
Tel. 281-531-6743／ Fax. 281-531-6795（事務局 火～金曜日）
Tel. ／ Fax. 713-973-0659 （職員室 土曜日のみ）
E-mail: jlssh@jeihouston. org Home Page: www. jeihouston. org

東日本大震災義援金 福島県教育委員会に届けました

健康診断等の用務で一時帰国中の中島満校長は、去る７月１１日（月）、帰省先である石川県から北陸自動車道、磐越道、東北道経由で福島県教育委員会まで、往復約 1,000 ㎞車を走らせました。昼少し前に福島県庁に到着し、学校生活健康課を訪れました。事前に到着時間を連絡してあったので、吉田尚課長さんはじめ関係者と面談し園児、児童生徒、保護者等からの義援金と中高等部からの激励色紙５枚を福島県教育委員会に届けました。

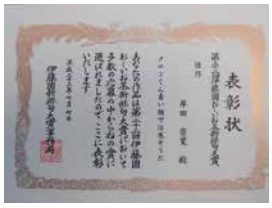
ヒューストン日本語補習校での募金額は３，２７６ドルと５０円でしたが、円高と換金手数料１ドル当たり２円、と言う事で、２５５，８８８円となりました。

「遠くからわざわざ届けていただいた・・・。」と大変喜んでいただき、「福島県の子どもたちの教育に使わせていただきます。」と課長さんは話していました。また「ヒューヘストンの皆様に心から感謝していることをお伝えください。」と依頼されました。

募金活動にご協力いただいた皆さんの熱い思いをしっかりと伝えることが出来たと実感致しました。ご支援をいただいた多くの皆様に心から感謝申し上げます。

表彰状・賞状が届きました

～伊藤園新俳句大賞事務局・日本作文会から～



第２２回伊藤園お～いお茶新俳句大賞で、佳作に入賞した３名への表彰状が補習校に送られてきました。佳作入賞者は岸田崇寛君（小３Ａ）、竹内泰雅君（小３Ｂ）、川瀬直輝君（帰国・中１年）の３名でした。

ほぼ在校生が揃う９月３日（土）表彰状を伝達致します。また、漢字検定の結果も届いたので結果の配布・伝達を本日８月６日に行い、伝達式を９月３日表彰状の伝達と合わせ行います。表彰を受けた３名に大きな拍手を送ります。

また、前にも学校便りに掲載しましたが、日本作文の会に応募した学校文集等の賞状も送られてきました。

学校文集「ブルーボンネット第３５集」は特別賞、「平和について考えよう」（佐藤暁子先生編著）は学習文集賞、「卒業文集平成２２年度」（宗吉康子先生編集）は新人賞、「学校便り平成２１年度」・「学校便り２２年度」（中島満編著）は特別賞です。先生方のガンバリに拍手致します。

以上、表彰状等を写真で紹介します。（学校便りの賞状略）。写真上から、岸田君・竹内君・川瀬君。そして、賞状は、左から学校賞のブルーボンネット・佐藤先生、宗吉先生。児童生徒の皆さんが一生懸命に学習に励んだ成果です。今後の益々の活躍を期待します。

塩むすび

三月十一日の東日本大震災から二か月、避難先を二度移動した祖母と母、私の三人は、K市にあるY小学校の体育館での生活が続いていた。布団が敷き詰められた居住スペースは、相変わらず窮屈だが、ここでの生活にも少しずつ慣れてきたところだった。

この避難所は人の入れ替わりが激しい。新たにできた仮設住宅へ転居する人やアパートへ転居する人、県外へ避難する人など様々である。はじめは百二十人程いた人々も今では七十人程度である。昼間は仕事を探して留守にしている場合が多いが、夕方になると戻ってくる。

避難生活が始まった当初は、支援団体による生活の支援があったが、徐々に自分たちで仕事の分担をするようになった。朝のゴミ捨て、掃除、支援物資の運搬、積み込み、入浴施設の清掃等。それらの中でなんといっても大変なのは、一日三回の食事の準備だ。食事係の募集が呼びかけられてもなかなか決まらない。ようやく食事係が決まっても人の入れ替わりが激しかったり、都合で食事係ができない場合があったりで、食事の時間は混乱する場面が多かった。

転校先の中学校が決まり、学校に通い始める少し前のことだった。二回目の募集の際に、母に促されて私

も食事係を担当することになった。これまでは、できたものを取りに行くだけで、片付けだけでも面倒くさいと思っていた。それなのに自分が作る方の立場になったのだ。実際、調理場は慌ただしい。栄養士さんが献立と分量を決める。それに合わせて食材を切ったり、味付けをしていく。いざその一員になると知らない人ばかりだし、どう動いていいかわからない。私は思わず母に、

「学校が始まるんだよ。忙しいんだからね。」

と当たっていた。

食事係になって二日目。調理場では、最近残菜が目立ってきたことが話題になっていた。疲労がたまって体力も落ち、一日動かずに過ごす人にとっては、お腹も空かないらしい。毎日の食事の量は、目に見えて減っていった。当然、作り置きしている冷たいご飯は、そういう状況では食欲をそそるものではなかった。

「ずいぶんせきをしている人が増えたみたい。このままではみんなの健康が心配だわ。」

「なんとかみんなに喜んでもらえる食事を提供する方法はないものかしら。」

「ああ。早く避難所を出て、自分の家であったかいご飯とおみそ汁が食べたいな。」

「そうね。ここでは、温かい食べ物が何よりもごちそうよ。」

「明日の朝は、私たちで温かいご飯とおみそ汁を出しましょうよ。」

「おにぎりなんてどうかしら。朝早いから塩むすび。」

（えっ、もっと早起きして集まるの。しかも塩むすびだなんて。具ものりもないおにぎりなんておいしいのかな。）

やっと今の仕事に慣れてきた私は、心の中で賛成しかねていた。けれども、避難所にいる人々の先の健康を考えると他に思いつくアイディアはなかった。

結局、この提案にみんなが賛成し、朝の集合時間を早めて、炊きたてのご飯でおにぎりとみそ汁を作ることになった。眠い目をこすりながら調理場に行くと、すでにみんなそろっている。ご飯も炊き上がっていた。

塩むすびを当番みんなで、「熱い、熱い。」と言いながら握る。おばさんたちの手はもう真っ赤だ。私も、おそるおそる握ってみる。形は悪いが、とにかく握った。七十人が二個ずつ食べるには百四十個も握らなければならない。私の手も真っ赤になった。

驚いたことに、おにぎりにしたら毎朝たくさんの子どもが自分から取りにきたのだ。塩むすびは子どもだけでなく、大人にも人気があり、二個、三個とお代わりをする人も増えてきた。

「ありがとう。おいしかったよ。」と言われた私は、照れくさくてしかたがなかった。

ご飯は、いつもおばさんたちが交代で炊いてくれる。塩加減も抜群だ。どうしたらあんなに早く握れるのだろう。私が一個握るうちに三個は握っている。しかも、目に見えないところでもおばさんたちの気配りはすごい。

塩むすびを配るときにいつも明るく、「いってらっしゃい。」と声をかける先﨑さん。片付けの手際がいい高橋さんは、最後の人が食器を片付けるまで待っていて、汚れた床を雑巾でいつも丁寧に拭く。夜に布巾を干しているのも知らなかった。大和田さんは、食材を組み合わせて、得意のわさび漬けを振る舞ってくれる。

おばさんたちの頑張りを見たら自分も何かしなくてはという気になってくる。

自分の知らなかった世界で、初めて考えさせられたことがある。温かい塩むすびと食事係を勧めた母に感謝だ。新しい学校への不安と期待はあるが、食事係で新しい世界を知った私のように、やってみなければ分からないことだってあるはずだ。

私は温かい塩むすびを一口頬張った。口の中に広がるお米の甘みと優しい塩加減が絶妙だ。何よりその温かさが体中にしみ渡る。そして温かい塩むすびに感謝したのは私だけではなかったようだ。あの日以来、朝の残菜はほとんど無くなったのだから。

塩むすび　にぎり続けた　手が赤い
被災地で　心にしみる　塩むすび

平成二十三年度「十七字のふれあい事業」応募作品より

（「教材作成委員会」作成）

ありがとうの唄

四月六日。始業式。今日からいよいよ三年生だ。

その日、ナッちゃんが転校してきた。そして、タクがいなくなった。タクの家の引っ越しと共に転校していった。震災以降、転校する生徒がいる。中学校生活もあと一年。この時期に転校しなければならないことを思うと切なくなる。みんなに挨拶することもなく、学校に置きっぱなしのこまごまとした荷物を片付けることもなく、タクは遠くの県に転校していった。

五月の連休が終わり、コウくんが転入してきた。これで四組は三十一名……と思ったら、またすぐにマーちゃんが転入してきた。これで三十二名。

一学期も終わりかけたころ、合唱コンクールで何を歌おうかという話になった。私は今年こそ伴奏者賞をとりたいと思っていた。去年、クラス合唱は金賞だったけれども、私は伴奏者賞がとれなかった。「目指せ、二連覇。伴奏者賞。」頑張るしかない。そう決意した矢先、先生が予想外のことを言い出した。

「自分たちで作詞・作曲をして、みんなで歌おう。作詞はみんなでひと言ずつ出し合って、それをまとめる。作曲コンクールで賞をとったことがあるからモモが曲をつければ大丈夫。それを、指揮者も伴奏者も立てないで、みんなで歌おう。」

とんでもない。できるわけがない。

きっと、ほとんどの人が直感的にそう思ったに違いない。二年生のとき、ほかのクラスの合唱はどれも上手だった。自分たちで作詞・作曲だなんて、金賞二連覇の夢を最初から諦めろとでもいうのだろうか。しかも、指揮者も伴奏者もいないだなんて、無茶苦茶すぎる。作詞をみんなでやるのはともかく、なんでそれに

私が曲をつけるの。私がやりたいのは伴奏で、作曲じゃない。絶対にイヤだ。そんな提案は受け入れられない。

一進一退の話し合い。なかなか決まらない。意見は割れ、何も決まらないまま、何日かが過ぎていった。このままでは夏休みに突入してしまう。早くしないと伴奏の練習だってできない。もっとも伴奏があるのかどうかさえ決まらないのだが……。

そこで、今日は一人一人の気持ちをとことん発表しようということになった。

何人かの発言に続いてさらに一人が手を挙げた。マーちゃんだ。たったひと月あまり前に来たばかりのマーちゃんが、クラスの一人として手を挙げていることが何だかうれしかった。マーちゃんは遠慮がちに立ち上がった。

「私……このクラス大好きです。みんな温かくて……。」

私も、みんなもマーちゃんの言葉をじっと聞いている。

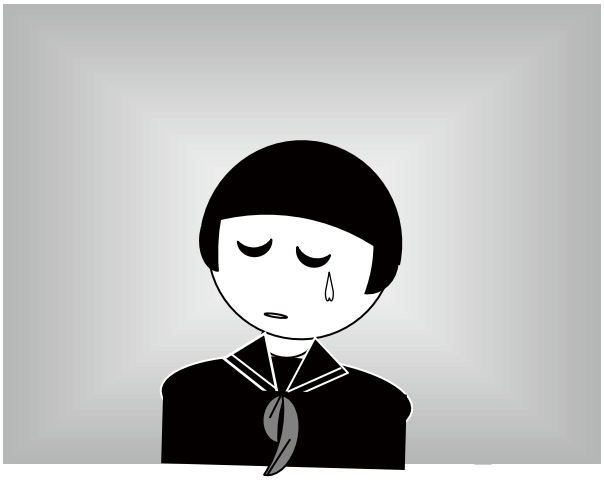
「私は、作詞・作曲をして歌う、というほうに賛成です。なぜなら……。」

マーちゃんは転校してきてひと月ちょっとだから、私がどんなに伴奏者賞をとりたいと思っているのか分かっていない。

「私、転校します。みんなといっしょのステージで歌えません。だから、だから……。」

マーちゃんが、また転校してしまうだなんて知らなかった。突然の告白に教室は静まり返った。

「せめて、作詞だけでも一緒にやりたい……。」



マーちゃんはぐしゃぐしゃに泣いていた。他にも何人か泣いていた。

私はとっさに手を挙げた。

「私は作詞・作曲でもいいかなと思います。」

あんなに迷っていたのに、そう言った。言ってしまった。

「――作曲……私はやりたくない、というわけじゃなく、ただ……こわくて……。」

私も思わず泣いてしまった。私の曲で賞がとれるのか、みんなが歌いやすい曲になるのか、なんて考えると、ここ最近、ずっと気になってしかたなかった。

最終的に、みんなで作った歌をア・カペラ[①]で合唱することが、全員一致で決まった。

二学期、マーちゃんの代わりに今度はミサちゃんが転入してきたので、四組は三十二名。みんなの思いを込めた、自分たちの歌を作ろう。誰ともなく黒板に出て、ひと言ずつ書き始めた。一人、また一人、黒板につづられる言葉は見る間にいっぱいになった。すでにここにはいないマーちゃんにも、タクにも連絡をとって言葉をもらった。この二人も、大事な大事な四組の仲間だから。

黒板を埋め尽くした言葉を何日もかけてつなげた。うまく収まらない言葉は、間奏部分でいうセリフにした。全員分の言葉が一つになった。歌のタイトルは『ありがとうの唄』に決まった。

コンクール当日。みんなで作った『ありがとうの唄』をみんなで心を込めて歌った。歌っている最中に思わずすすり泣いたサー

① 楽器の伴奏を伴わない合唱曲。

ありがとうの唄。

作詞・三年四組

泣いて　笑って　過ごした日
三十五人の仲間とともに
あと　もう一歩　届かない
あの夢を手に入れるために
後ろ向かず　前だけを見て
僕らは心に決めた
「絶対に負けない」と
夢は永遠（とわ）に　輝くから
どんなにつらくても
みんながいてくれたから　強くなれた
感謝の言葉が　いっぱい
心から「ありがとう」
忘れない　この言葉
あなたに伝える「ありがとう」

強い絆と　強い気持ち
いつまでも　消えない　思いを両手に
苦い思い出が　脳裏をよぎる
あの日の記憶　悔やんだ日々
いろんな壁にぶつかり　四苦八苦
本気で泣いて
本気で笑って
本気で悩んで
涙をたくさん
流すのは　信じているから
とまどいながら
僕たちは　不確かな道を探す
互いを思い合うように
僕らの足跡は　僕らの中にあるんだ
「いつまでも」
生きてこその出会い「ありがとう」

ちゃん。いや、サーちゃんだけじゃなかった。みんな泣き出しそうなのをこらえているようだった。会場からも鼻をすすっている音が聞こえてきた。

そして、表彰の時間。結果発表を待った。結局、何一つ賞はもらえなかった。けれども、みんなと一緒に連れだって帰ったあの日の空は、どういうわけか忘れられないくらいきれいな夕焼け空だった。

（「教材作成委員会」作成）

五〇〇人の大家族

私は父の言葉に耳を疑った。
「覚悟があってのことなんですね。」
念を押すように、母が聞き返す。
「もう決まっている。この先、営業はしばらく無理だ。後悔したくない。」
父の言葉をかみしめるように聞いていた祖父が、ゆっくりとうなずいた。
「分かった。好きにしなさい。」

父が、被災者を無料で受け入れたいという提案を家族にしたのは、東日本大震災の翌日だった。わが家は、曾祖父の代から福島県で温泉旅館を営んでいる。この地区は幸い地盤が固く、あの大きな地震でも配管が少し壊れただけだった。私の家族も、従業員の家族も全員が無事だった。建物と、全員の無事を確認してから、父は家族を集めて言った。
「福島が、東北が、大変なことになっている。この旅館を困っている人たちに使ってもらいたい。ここまで避難して来てくれたら、後はゆっくりしてもらおう。もちろんお金は要らない。」
大震災で各地が大変なことになっていることは、中学生の私にも理解ができた。でも、なぜうちがそこまでするのか。思わず口から出かかったが、言葉にはならなかった。兄を見ると、けわしい表情で、やはり黙ったまま何かを考えていた。
翌日、父は、今度は従業員を集めて話をした。みんな、私が小さいときからここで働いてくれている家族みたいな人たちだ。きっと反対するだろう。無料で受け入れるなんてことをしたら、ここはつぶれてしまうもの。父の話が終わると、兄が声を荒げて言った。兄は調理場の責任者をしている。
「そんなことしてたら、うちの旅館はつぶれてしまいますよ。みんなの給料だって、どうするんですか。」

「まあまあ、あつし、そう言うな。」
調理長の加藤さんが、間に入って言った。
「まず、お米を確保しなければなりませんね。いつもの農家さんにすぐ相談しましょう。」
「社長、配管修理も進めておきます。」
と、フロント係の佐藤さんも言う。父は笑顔でうなずく。
「みんな、ありがとう。がんばってくれ。必要なものは手分けして準備しよう。」
兄は、一人だまったままだった。私は兄と同じ思いでみんなの姿を見ていた。しかし、そんな私たちの思いと裏腹に、受け入れの準備は進んでいった。

受け入れの準備が整い、新聞に記事が掲載されるや否や、問い合わせの電話が鳴りやまなくなった。その後、原発の事故が発生したため、旅館の前には昼夜を問わず被災者の車が到着し、従業員のみんなは、一日中対応に追われるようになった。
旅館に着いた人たちは、殺気立っていたり、ほっとした表情を見せたり、さまざまだった。
「まずは、お風呂に入って体を温めてください。それからお部屋にご案内いたしますね。」
そう言う母の笑顔だって疲れていた。ほとんど眠っていないのだろう。ずっと駐車場で車を誘導している小林さんにしても、体が冷え切っているはずだ。父のこの決断は、家族ばかりでなく従業員たちも苦しめているようにしか思えなかった。

一人のおじさんが、厨房に顔を出したのは、そんなときだった。
「何か、お手伝いできることはありませんか。」
調理長が、ほっとした表情を見せる。
「お言葉に甘えていいですか。このおにぎりを二階に運んでいただけると助かります。」
それ以来、

「お手伝いしますよ。」
「トイレの掃除、しておきました。」
宿泊者の中からそんな声が次々に聞こえるようになった。ほとんど休まずに働いていた父母も従業員たちも、少しずつ休める時間ができるようになった。

受け入れから五日がたった。
「地震がなかったら、友達と遊びに行く日だったのに……。」私が一人でそんなことを考えていると、宿泊者のおばあさんが、たたんだタオルの束を抱えて厨房に入ってきた。
「おじょうちゃん、タオル乾いたけど、どこに運べばいいの。」
「あ、ここにお願いします。」
「私はね、毎年この旅館に来るのが楽しみだったのよ。ここに来るとほっとしてね。こんな形でお世話になるなんてね……。あなたのお父さんに何かお返しがしたくって。こんなことしかできないけど。」
立ち上がってタオルの束を受け取ると、おばあさんは私の手にしわしわの手を重ねて言った。
「おじょうちゃんも毎日大変だね。いつもありがとうね。」
私は何と答えてよいか分からず、
「はい。」
と返事をするのが精一杯だった。おばあさんのしわしわの手のぬくもりが私の手に、いつまでも残っていた。

夕方、お風呂に入ろうと大浴場に続く階段を下りて行くと、話し声が聞こえてきた。見ると、浴場前のベンチに腰かけて、兄と父が話をしていた。父は兄に責められているのだろうか、私は思わず耳をすました。

「あつし、今な、この旅館には約五〇〇人がいっしょにいるんだ。五〇〇人の大家族ってことだ。すごいだろう。」
「父さんは、なんで従業員を犠牲にしてまで受け入れをしているんだよ。俺たちだって被災者じゃないか。」
「そうだな、たしかに被災者だ。でも、犠牲というのは違う。うちの旅館が三代にわたって続いてきたのはな、これまで多くの人々の支えがあってこそなんだ。その恩を返せるのは今しかないと思った。私は、必ずもう一度営業を再開する。毎年ここを利用してくれているおばあさん、息子さんは被災現場に残って離ればなれの生活なんだ。でも、いつかまた、家族そろってみんなでここに来てほしい。それまで、ここはつぶすわけにはいかない。そのときは、お前がここを受け継いで迎えてほしいんだ。」
「父さん……。」
「今日は、お前とゆっくり話ができてよかったよ。ずっと忙しかったからな。頑張ってくれているお前にも、従業員にも感謝しているよ。」
兄はだまってうつむいていた。私は足音を立てないようにその場を離れた。

翌朝、一階に降りていくと、朝食の準備に追われている厨房から、従業員に指示を出す兄の大きな声が聞こえてきた。私は入り口ののれんをくぐると、兄に負けないくらい大きな声で言った。
「三階のお食事は、私が運びます。」
兄と目が合った。久しぶりに見た兄の笑顔だった。

（「教材作成委員会」作成）

手渡されたパン

「これから、どうなってしまうんだろう？」

三月十一日午後二時四十六分、今までに経験したことのない大地震が起こった。

余震が続く中、教員の父と母が、勤めている学校から夜遅くに帰ってきた。震災後の対応に追われている両親は、かなり疲れた様子だった。しかし、翌日も翌々日も両親は避難所となった学校へ行ってしまった。

こんなときなのに僕と弟の二人を残して行ってしまうのだ。祖母が食事を用意していてくれたが、

「ご飯なんかいらない。」

と、ぶっきらぼうに言ってしまう。そのとき、いつもは穏やかな祖父が語気を強めて言った。

「こんな状況でもご飯が食べられることをありがたいと思いなさい。」

（こんな状況だから食べられないんだよ。）

毎日外に出られないことにも腹が立っていた。小さな弟は大きな紙にクレヨンでお絵描きをしていた。

「お兄ちゃん、いつ、お外で鬼ごっこできるかなあ。航君と遊びたいなあ。」

（弟も外で遊ぶこともできず、不安なんだ。）

震災から八日がたった。その晩、父が決心したように言い出した。

「避難するぞ。」

「どこへ行くの。」

「南へ、とにかく南へ行く。」

母が、

「茨城のたまみおばちゃんちに行くのよ、覚えているでしょ。」
と言った。
父と母に促されて、家族六人全員が車に乗り込む。真っ暗な でこぼこの夜道を、父は慎重に車を走らせた。
深夜、おばさんの家に到着すると、おばさんが玄関の前で待っていてくれた。
「無事でよかった。さあさあ、早くお上がんなさい。」
「ありがとうございます。お世話になります。」
と両親は頭を下げた。僕と弟は、すぐに、二階の六畳間に通され、そのまま休むように言われた。弟はすぐ寝息をたて始めたが、僕はなかなか寝付けず、何度も寝返りを打った。両親は明け方までおばさんと話しこんでいるようだった。
翌朝、目が覚めて下に行くと、みんなは既に朝食を囲んでいた。
「よく寝ていたので起こさなかったのよ。」
と母が言った。僕は、たった一口しか食べられなかった。おばさんは、
「お口に合わなかったかしら。」
と心配そうに言ってくれた。
「別に……。」
「あら、食べないと体に悪いわよ。」

僕は黙って席を立つと、部屋に戻った。両親はそんな僕の態度に怒っているようだった。

僕は、むしゃくしゃして外に出た。弟も慌てて後についてきた。知らない土地で友達にも会えない。外に出ても僕の気持ちはおさまらなかった。思わず出た大きなため息とともに、ぐうっとおなかが鳴った。僕は初めておなかがすいていることに気がついた。そして、さっき朝食を食べなかったことを後悔した。

近くの公園でブランコに乗ってはしゃいでいる弟をぼんやりと眺めていると、知らないおばあさんが通りかかって、

「かわいい子だねえ。いくつ。」

と聞いてきた。弟は、大きな声で、

「三つ。」

と答えた。

「ここら辺では見ない子だね。どこから来たの。」

と、今度は僕に聞いてくる。

「福島。」

僕は、無愛想に答えた。すると、おばあさんは驚いた表情で、僕と弟を交互に見つめ、

「大変だったわねえ。無事でよかったわねえ。」

と涙ぐみながら言った。おばあさんは、持っていた買い物袋からパンを取り出し、

「おなかすいてないかい、これ食べて元気を出して。」

と、僕たちに渡してくれた。

「ありがとう。」

弟は大きな声で言いながら、もう既に袋を破ってパンをかじっていた。

「お兄ちゃん。おいしいよ。」

「よかった。お兄ちゃんも食べなさい。おなかがすいてると力が湧かないでしょ。食べて元気を出しなさい。食べると笑顔になるものよ。」

僕はその言葉を聞いて、はっとした。そして、祖父の言葉を思い出した。

『ごはんが食べられることをありがたいと思いなさい。』

勧められるままに手渡されたパンの袋を破り、一口かじった。訳もなく涙が込み上げてきた。おばあさんは、僕の背中をさすってくれた。

僕と弟は、おばあさんと別れた。そして、まだ遊びたそうな弟の手を強く握って言った。

「家に帰ろう。おばさんに、そして、お父さんとお母さんに謝らなくちゃ。」

今朝の自分の態度を思い出しながら、もと来た道を足早に歩いた。

（「教材作成委員会」作成）

この町のために

「ちょっと出かけない。」
あの大震災から何日かたった三月のある日。母が私を誘ってきた。
「ガソリン大丈夫なの。ドライブどころじゃないでしょう。」
「いいから、いいから。」
母が、珍しく強引に私を連れ出した。私は、久しぶりの外出に少し緊張していた。見慣れたはずのいつもの道。いや、「いつもどおり」じゃない。屋根瓦が落ちた家、所々陥没した道路、傾いた看板、母はどういうつもりだろう。

車は中学校に近づいていった。
「もうすぐ入学式ね。四月六日、予定どおりだって。」
そのとき、校舎の窓に掲げられた大きな文字が目に飛び込んできた。
『大好きな　国見町①』『支えよう　県中生』
私は、胸が熱くなった。
「学校は大丈夫そうね。」
学校の前に車を停めた母は、緩やかに車を走り出させた。
（そうだ、私は中学生になるんだ。）
私は、交差点で右折して見えなくなるまで中学校を見つめていた。

いよいよその日がやってきた。午前中は、一か月遅れの卒業式、そして午後は、緊張の中での入学式。中学校生活のスタートだ。

① 国見町

（中学生になったんだ。勉強もがんばる、部活もがんばる、新しい友達も作るんだ。しっかりしなくちゃ。）

しかし、そんな最初の意気込みとは裏腹に、実際は、うまくいかないことばかりだった。授業を一生懸命受けているつもりでも、周りの雰囲気にのまれて手を挙げることさえためらってしまう。部活動では先輩の指示に戸惑うことばかりで注意を受ける。落ち込む毎日だった。中学校は、生徒数も多くて、私が何もしなくても学校生活はどんどん進んでいく。

（まあいいや、どうだって。）と思い始めるようになった頃、総合的な学習の時間がスタートした。学習のテーマは『町を知る』だ。活動を通して、町の復興のためできることを考える、ということになった。

「明日までに取り組んでみたいことを考えてきてください。」

帰りの会で先生から話があった。

町のためにできること。中学生に何ができるのだろうか。

家に帰ってから、食卓でぼんやりしていた私に、母が話しかけてきた。

「どう、学校は。」

「ううん。まあまあ。」

「まあまあか。」

課題を思い出した私は、母に尋ねてみた。

「ねえ、お母さん、町のためにできることなんてないよね。」

「町のために、中学生ができることでしょ。そうねえ。」

首をかしげた母は、何か思いついたように言った。

「悠里、あの言葉、覚えている。『大好きな国見町』。」

「『支えよう県中生』。」

思わず、母と私の声がそろった。

「町のために、できること。きっとあるはずよ。」

そのときよみがえってきたのは、あの日の気持ちだった。
「うん。考えてみる。」

翌日の総合的な学習の時間は、学級委員長、副委員長の二人が話し合いを進めた。
「震災で被害を受けた町のために、できることはありませんか。」
「募金活動。」
「がれきの片づけ。」
その後も、ごみ拾い、バザー、仮設住宅の訪問など、さまざまな案が飛び交った。
（私が黙っていても、誰かが意見を出すだろう。私が手を挙げなくても、きっと話はまとまるんだ。でも、それでいいのだろうか。）
司会の二人が
「それでは、そろそろ意見をまとめたいと……。」
と言いかけたとき、私は思わず手を挙げてしまった。
「うちわ……。うちわ作りはどうですか。」
「何それ。」
「なんでうちわなの。」
学級がざわめく。
「あのう、私の母は、仕事で仮設住宅に行くことがあるんですが、仮設住宅にはエアコンがなくて、夏の暑さが心配だと……。それで……、少しでも涼しさを感じてもらえるように、うちわを贈るのと……、あと、うちわにメッセージを付けたらどうかと思うんです。」
「メッセージ？」
「うちわを手作りして、そこにメッセージを添えたらいいと思うんです。私も、震災のとき、言葉に元気をもらったから、今度はこの元気を誰かに届けたいんです。」

「へええ、うちに古いうちわがあるよ。」
「やってみたい。」
「おもしろそう。」
「いいんじゃない。」
私の意見がみんなに受け入れられたのだ。

数日後、うちわ作りが始まった。それぞれが一枚一枚にイラストを描く。そして、思い思いのメッセージをつけていく。
私も心を込めて、うちわを作った。下書きをして、色を塗っていく。
肩越しにのぞき込んできた友達が、私のうちわに書かれた言葉を読み上げた。
「『大好きな国見町。私たちが支えます。』なんかいいね。」
「ありがとう。これね、私が元気をもらった言葉をヒントにしたの。」
「あっ。」
と小さく声を上げた友達は何か思い出したようだった。
「『大好きな国見町』。」
「『支えよう県中生』。」
友達と私の声が重なった。
「きっと、このうちわをもらった人も、元気になるよね。」
ひさしぶりに、学級の中に明るい声が響きわたった。

（「教材作成委員会」作成）

仮校舎

僕は都路中の三年生。

郡山から、旧春山小学校の仮校舎までスクールバスで四十分かけて通っている。

用務員の土屋さんは、僕によく声をかけてくれる。

「貴紀君、元気かい。卓球部の練習、がんばってるんだろう。遠くから通いながら部活をするのは大変だね。」

そんな土屋さんも都路町から避難し、田村市にある仮設住宅に住んでいる一人だ。

「土屋さんこそ、毎日おそうじ大変ですね。」

「校舎を借りているんだから、あたりまえですよ。」

（校舎を借りているって言っても、すでに廃校になっている学校なのに。）と思ったが、僕は口には出さなかった。

学校には、全国各地、海外からさえも、「負けないでください。」「心から皆さんを応援しています。」などのメッセージが毎日のように届けられる。ノート、鉛筆などの学用品から、「美しい花を見て、元気を出してください。」とたくさんの花の苗を贈ってくれた会社もあった。田村市からも「元気を支援する事業」として、野球観戦や講演会、体験学習など、いろいろな機会を設けてもらった。こんなにもたくさんの人たちが僕たちのことを気にかけて応援してくれる。しかし、校舎は元小学校だっただけに、教室も体育館も校庭も何もかも小さい。狭い体育館で、スクールバスの時間を気にしながらの部活動の練習は、なんとなくもど

かしかった。限られた時間と場所での練習では強くなれるはずもない。僕は、日々支給される支援物資や励ましのメッセージにも、気持ちを動かされなくなっていった。そして、だんだん投げやりな気持ちになっていた。

何か大事なことを忘れてしまっていないか。このままではいけないのではないか。僕がこんなふうに思い始めたのは、ある出来事がきっかけだった。

五月の日曜日に実施された親子奉仕作業。その前夜から降り始めた雨は、やむ気配がなかった。

（こんな雨なのに、どうして奉仕作業なんてやるのかな。わざわざ学校まで出かけていくなんて、面倒くさいなあ。）

そう思いながら、僕は、しぶしぶ母の車に乗った。

学校に着くと、既にたくさんの人たちが校舎の玄関前に集まっていた。土屋さんも来ていて見知らぬ大人の人たちと用具の準備をしていた。そう言えば、今日は、地区の人たちも学校の奉仕作業に参加してくれると言っていた。

「兄ちゃんは、どこから通ってるの。」

「郡山からです。」

「遠くから大変だね。わざわざ雨の中、奉仕作業に来るなんてえらいね。俺は、この小学校の卒業生なんだ。都路中のみんなに校舎を使ってもらってうれしいよ。がんばれよ。」

地区の人にそんなことを言われて、しぶしぶ学校に来たことが少し後ろめたくなった。

奉仕作業が始まり、みんなはきびきびと働き始めた。雨は激しく降り出していて、カッパやウィンドブレーカーを着ていても、ずぶ濡れの状態だった。友達もそんな大人たちに混じって、ひたすら草をむしったり、たまった草をかき集めたりしていた。僕も、雨でぐちゃぐちゃになった校庭の草を一心にむしった。手は冷たい雨でかじかんできたけれど、終わってみると、あんなに乗り気でなかった作業時間が不思議と短く感じられた。

次の日、朝の集会で校長先生がおっしゃった。

「昨日の奉仕作業、ごくろうさまでした。皆さんのお父さんやお母さん、そして、春山地区の方々が一生懸命学校をきれいにしてくださいました。地区の皆さんにとって、この学校は心のよりどころなのだそうです。都路中が校舎を使っていることをとても喜んでくれています。皆さんががんばっている姿を見て、元気をもらえると言ってくださいます。しかし、地区の皆さんが、あなた方に温かい手を差し伸べてくれているのをあたりまえだと思っていませんか。あなたたち一人一人が、自分で何をすべきなのかを考えてほしいと思っています。」

僕は、それまでの自分を恥ずかしく思った。

六月の中体連最後の団体戦、僕は全力を出し切って試合をすることができた。チームの仲間もがんばった。

友達も春山地区の人々も大きな声で応援してくれた。結果は、五対〇の完敗だった。

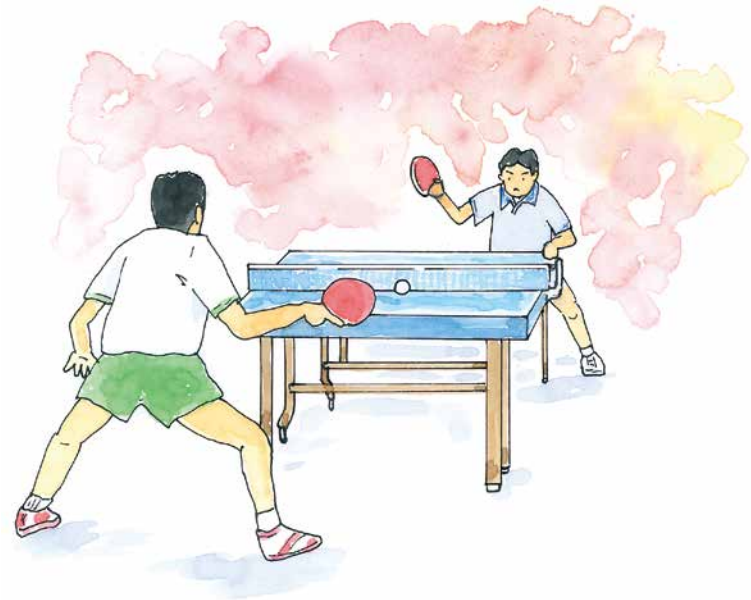
試合から帰ってきたとき、土屋さんが声をかけてくれた。

「おつかれさま。がんばったね。応援盛り上がっていたよ。」

「はい。ありがとうございます。思い出に残るいい試合ができました。」

僕は自分の弾(はず)んだ声に驚いた。

（「教材作成委員会」作成）



たった一秒の「ありがとう」

三月十一日。東北そして私たちの故郷を恐ろしい地震と津波、予期せぬ原発事故が襲った日だ。私たち家族は、地震発生直後の真暗闇の夜を祖母の車の中で過ごし、翌朝大好きな故郷を離れた。すぐに戻れるだろう。移動用バスの中で私は、軽い気持ちでそんなことを思っていた。だが、原発から漏れ出た放射能は、私たちをそう簡単には戻してくれなかった。

避難所に到着し、私たちはここでしばらく過ごすことになった。母や祖母の不安そうな表情を見て、私の頭は混乱した。その日は疲れて寝てしまった私に、翌朝次々と問題が襲ってきた。お風呂がない。トイレが流せない。着替えもない。歯も磨けない。今まであたりまえとして行ってきたことが、あたりまえではなくなっていたのだ。それは、二か所目の避難所に行っても同じだった。広い体育館では、いつ誰が見ているか分からない。人前で着替えなどできるはずもなく、ふとんの中で

隠れながら着替えた。夜になり、みんなが寝静まると、赤ちゃんの泣き声や話し声、人の動く音など、ぐっすり眠ることさえできなかった。一日おにぎり一個の日もあり、数少ない食べ物の中には、賞味期限が切れているものもあったが、誰も文句など言わず黙々と食べていた。毎日知らない人と過ごし、ダンボールで囲まれた場所での生活は、暗いトンネルの中に入り込み、出口の見えない状態であった。

避難生活をしている間、私たちは人間としての人権や自由を完全に奪われていた。「被災者だから我慢しなければならない」と祖母に言われた。そのことは十分頭では理解している。でも、そんな状況が一か月も続くうちに私の心は壊れていった。ささいな事でもすぐ怒り出したり、涙ぐんだりしていく自分の心の弱さが自分で許せなかった。精神的に追い込まれていく自分の心がコントロールできなくなっていった。そんな中、ボランティアの人たちの献身的な心遣いに、私の心が少しずつ和らいでいった。優しい一言に温かい光を感じた。救われた。そして、自分を取り戻せた。

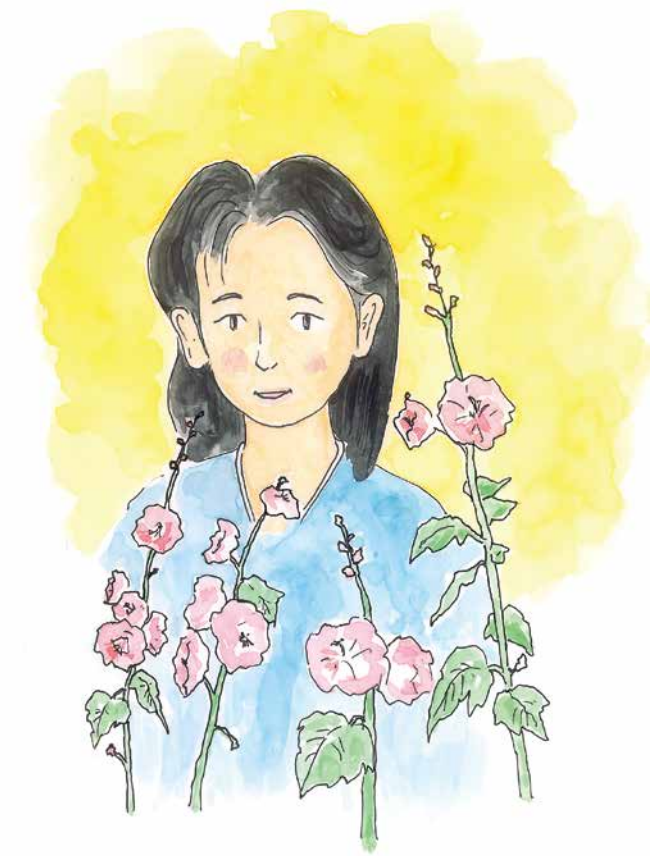
その後、私たちは会津若松市に避難した。初めは「また嫌な思いをするのだろうか」と不安だった。だが、会津の方の温かい心は、私たちに生きていく勇気と安らぎを与えてくれた。避難先のホテルでは、部活を終えて帰ると、スタッフの方が優しい笑顔で「おかえり」と言ってくれ、おいしいご飯を用意して待っていてくれた。子供たちと遊んだりお年寄りには世間話をして笑わせたりして心を和ませてくれた。私はここで、ようやく「人間らしい心と生活」に戻ることができ、人の心のぬくもりをひしひしと感じることができた。

全ての人間に平等にあるもの、それが「人権」であったはずだ。では、私たちの体育館での生活には果たして人権があっただろうか。「被災者だから」という一言の言葉で片付けられ、プライバシーも安らぎもないあの生活の中に人権はなかったのだと思う。

ある日、母の車の窓から外を見ていると、私の目は、看板の言葉にくぎ付けになった。「立葵のてっぺん

の花が咲くと梅雨あけです。『ありがとう』は、たった一秒の言葉です。暑さをのりきってがんばろう。」私はすぐに口ずさんだ。「ありがとう」確かに一秒だ。私の心が梅雨あけのようにさわやかに晴ればれとなっていくのを感じた。

先日、学校に支援のレトルトカレーが届き十袋ずつ配られた。私は「十袋も重いな。他にも荷物あるし。持ち帰るの嫌だな。」と心の中で思っていた。その時、教頭先生から「今日のカレーは兵庫のある会社からいただきました。震災から一年以上も経っているのに、今もこのように支援して下さる方がいます。皆さん、感謝の気持ちを持って家族で味わって食べて下さい。」という放送が入った。私は頭を殴られた思いで、自分のすさんだ心が恥ずかしくなった。その時ふと、先日見た看板の言葉が頭に浮かんだ。「たった一秒の『ありがとう』」を私は忘れていたのだ。私たちは支援していただけることに慣れてしまってはいないか、あたりまえに思って甘えてはいないだろうか。私は、自分の心の中にある「慣れという恐ろしさ」にがくぜんとした。



体育館に避難した時の辛(つら)さや苦しさ、そして今の生活の不便さに不満をもち、自分が出来ないのは誰かのせいだと、相手を責めることばかりしていた自分に気づいた。確かに避難した時は、人間らしい環境(かんきょう)ではなかった。人間としての平等や自由も与えられなかった。しかし、今は世界中の人の温かい支援に助けられて生活している。私たちは世界中の人への感謝の心を忘れてはいけない。

今は、故郷にも自宅にも帰れない。これから先どうなるのかという不安もある。たくさんの「ない」の中で、私は人間としての尊厳だけは決してなくさないようにしたいと思っている。そして、「たった一秒の『ありがとう』」の重みを心に刻んでおきたい。

（「第三十二回全国中学生人権作文コンテスト」　生徒作文）

紫紺の襷

早朝から太陽がぎらぎらと照りつけるグラウンドで、駅伝部の練習が今日も始まった。練習は、毎朝一時間ほど行われる。ストレッチやジョギングから、徐々にハードな走り込みへと進んでいく。顧問の原田先生は、今日も誰よりも早くからグラウンドに立っている。そして、先生の的確なアドバイスがグラウンドに響き渡る。

「高志！　膝から下をもっと前に出すイメージで走れ。上体を起こして、腕をもっと後ろに振って走らないと、スピードが乗ってこないぞ。」

僕は、二年生に進級したが、一年生から続けてきた野球部でも勉強でも、満足のいく結果は残していなかった。そんなとき、同じ野球部の同級生である敬介に誘われて、僕は駅伝部に入った。駅伝部は、九月に行われる地区大会、それを勝ち抜いた学校だけが出場できる十月の県大会をめざして結成される特設の部活動で、他の部とのかけ持ちができる。

僕の通うＹ中学校が、かつて県中学校駅伝競走大会において三連覇を成し遂げたことは、Ｙ中出身の両親から何度も聞いたことがある。両親は、駅伝部でもなかったのに誇らしげに語るのだ。僕は、そんな両親の話を他人事のように聞いていた。そして、（昔と今は違う。生徒数は減ったし、そんな活躍を今のＹ中生に求めるのは無理だよ。）

「紫紺」
紺がかった色。濃い紫色。

「襷」
細長い布を輪状にして、一方の肩から他方の腰へ斜めにかけるもの。

と半ばあきらめていた。実際に、ここ十年もの間、Y中駅伝部は県大会出場さえ果たしていない。

七月に入り、駅伝部の練習は本格的なものになっていた。傾斜のある道路での走り込みや、大会コースでの試走をする。今日の練習はとりわけきつかった。何しろ昨日まで三泊四日の野球部の遠征に行っていて、今日はその直後の練習だ。体が重く感じられ、全くスピードが乗ってこない。タイムも遠征前に比べて、だいぶ遅くなっている。

駅伝部の練習では毎回タイムを計るので、力を付けてきているのが誰なのか一目で分かる。敬介は、僕より十秒ほど速いタイムでゴールした。敬介の背中を必死に追いかけながら、遠征先でも野球部の練習が終わってから、薄暗いグラウンドを一人で黙々と走る彼の姿を、僕は思い出していた。

駅伝競技では、大会直前の期間に休みは二日続けないというのが鉄則だ。

「地区大会まであと一か月しかない。野球との両立は大変だと思うが、遠征中も何とか時間を見つけて走っておくんだぞ。」

遠征に出かける前、原田先生から言われた言葉が、今になって思い出された。

「どうした、高志！　お前の走りができていないだろう！」

原田先生はそう言ったきり、僕の前を立ち去った。そして、その言葉は、いつまでも僕に重くのしかかっていた。

練習が終わり家路を急ぐ僕に、「高志君。」と声をかける人がいた。声のする方を振り向くと、Y中駅伝部OBで県大会三連覇を成し遂げたメンバーの一人、新田さんだった。今は村で建設業を営んでいる。時々練習に顔を出し、僕たちを励ましてくれたり差し入れをしてくれたりする。

「調子はどうだい。地区大会までもう少しだからね。」

僕は、
「まあまあです。」
と曖昧に答えた。
「昨日、原田先生に会ったら、『Y中駅伝部の鍵を握っているのは高志だ。高志はまだまだ伸びる力がある選手だ。』って言ってたぞ。」
僕は驚いた。
「しかし、原田先生も熱いよな。ここまで面倒見てくれるなんて。聞けば、原田先生の自宅は原発事故のため帰還困難区域①になっていて、当分戻ることができないそうだ。遠くに避難している家族とも、めったに会えないって言ってたぞ。」
僕は、心のどこかで駅伝を投げ出していた自分に気付き、恥ずかしくてしかたがなかった。

翌日、僕は原田先生に、夏休みの間、夕方行っている駅伝部の練習に参加させてほしいと申し出た。自分の部活動の練習が終わってから、自主的に駅伝の練習に励む生徒が、敬介の他にも数名いたのである。
「高志！　待ってたぞ。」
敬介のいつもと変わらない明るい声が、今日は涙が出るほどありがたかった。そして、グラウンドを照らすわずかな明かりを頼りに、練習が始まった。

① 原子力災害により五年以上の長期にわたって居住が制限される地域

「高志！　苦しくても敬介についていけ。」
原田先生の気合いの入った声が、グラウンドに響き渡る。練習は、大会の数日前まで続いた。

地区大会を三日後に控え、大会登録メンバーが発表された。二年生からは、僕と敬介が選ばれた。そして原田先生は、僕たちの目の前に紫の襷を掲げた。襷に刻まれたＹ中の名は力強く見えた。
「長距離走の中で、駅伝競技だけにあるのが、この襷だ。この襷をつないで走るのはお前たちだ。Ｙ中という一本の襷を、今日まで途切れることなくつないできたことは、決して容易なことではなかったはずだ。この襷の紫は、走る人の汗によって紫紺となる。三年後、Ｙ中は統廃合で閉校となるが、この襷は必ず受け継いでいかなくてはならない。」
原田先生は、一言一言をかみしめるように言った。

それから僕たちは、雲一つない秋晴れの空の下を競うように走り始めた。紫紺の襷を胸に描きながら。

（「教材作成委員会」作成）

家路

「ありがとう。あなたには、無事にたどり着いたと伝えたかった。」
電話の向こうは涙声だった。
「本当によかった。お互い必ず乗りきって、いつか必ず会いましょう。」

三月十一日（金）午後二時四十六分。
出張先の霞ヶ関ビルの六階で大きな揺れを感じた私は、ただならぬ揺れに鳥肌がたった。会議は中止となり、帰宅するよう指示された私は、余震におびえながら階段を降り、外に出て驚いた。歩道は、溢れんばかりの人だった。
とっさに、家のことが頭に浮かんだ。家は、大丈夫だろうか。新幹線は、走るのだろうか。頻繁に襲う余震を足の裏で感じながら、前の人について歩く。「東京[①]駅まで着いたら福島[②]に帰る方法が見つかるかも知れない。」
日比谷公園入り口では、立ち止まらないようにと警察官の誘導する声が飛ぶ。間違いない。駅はこっちだ。ふと、昼間買って飲みかけたペットボトルの水を思い出し、ひとくち飲んで我に返った。何としてでも、家に帰りつかねばならない。みぞれ交じりの雨が降り始めた東京で、そんな思いが、私を奮い立たせていた。
東京駅中央口が正面に見える喫茶店で、私は、携帯電話を充電させてもらいながら、家にメールを送り続けた。ワンセグで観るニュースの映像は、映画のワンシーンのようにどれも信じられない光景ばかりだった。
何度かけても電話はいっこうにつながらないままだった。

喫茶店は、朝の四時まで営業と聞いたが、絶え間なく続く余震と政府からの重大発表があるとのことで、午前三時に閉店を告げられた。お礼を言って店を後にしたが、新幹線の復旧の目処（めど）が立たず、行くところがない。私は、仕方が無く、出張先の会議室に戻ることにした。地下鉄は、各駅停車のうえ一時停止を繰り返しながら時間をかけて進む。そして、昼間やっとの思いで逃げ出したビルに戻ることができた。

私は、そこで帰宅困難者リストに名前を記入した。講堂で防災シートを受け取って、靴を脱いで横になる。ひょっとしたら、これは、架空の防災訓練ではないか。早く誰か終わりを告げてくれないか。そんな思いが溢れて一睡もできなかった。

三月十二日（土）午前七時十分。

私は、思い切って大宮駅に行くことにした。ペットボトルの水をひとくち飲んで、自分に言い聞かせる。電車がだめなら国道に沿って歩くしかない。

霞ヶ関を出発すると、東京駅から京浜東北線で大宮駅に半日かけて行くことが出来た。駅は、信じられない人混みで、構内に入るにも規制が敷かれた。電車一本に対して、ホームに入る人数を制限するのだ。構内では、駅員に罵声を浴びせている人もいた。誰が悪いわけでもない。ただ、現実を受け入れられない人がいた。

三月十二日（土）午後八時四十五分。

大宮駅から東北本線に乗り換えて、宇都宮駅に着いたのは夜だった。電車はここで終点となることをアナウンスが繰り返し告げていた。このまま宇都宮駅前で一泊する。明日は、どうしたらいいのだろう。

三月十三日（日）午前五時二十分。

早朝の駅で、情報を収集する。テレビの情報だと新幹線は終日運休とのこと。電車は動くのか。代替輸送

はあるのか。バスは、タクシーは、走るのか。改札で、すべての電車が終日走らないことを知った私は、取り敢えず、駅前のバス停にむかった。ペットボトルの水は、すでに半分を切っていた。

「あの、どちらまで行きますか。」

私に声をかけてきたのは、若いサラリーマンだった。

「タクシーを予約することが出来たんです。自分は、宗像と言います。北に行くのならごいっしょしませんか。郡山まで行きたいんです。」

自分の町の名がこれほど懐かしく聞こえたことはなかった。

「私も、郡山に行きたいんです。いいんですか。ご一緒しても。」

「ええ。僕と、先ほど知り合ったあの方、吉田さんは、仙台に行きたいそうです。あなたを入れて三人ですが、大型タクシーは六人乗りなので、あと三人乗れます。」

「どこに向かうんですか、そのタクシー。いっしょの方向なら乗せてもらえませんか。」

声の方を振り返ると、作業着姿の男性がいる。今、思えば山口さんとの出会いだった。

「まず、郡山をめざします。そこまで、ごいっしょできる人を三人捜しています。」夢中で説明する私の言葉に一つ一つうなずきながら、山口さんは、自分の目的地は岩手までだが、とりあえず、郡山までいっしょに移動したい、と言う。これで四人。あと二人乗れる。

「下のバス停で、白河駅まで行きたい人がいました。今なら間に合うかも知れません。タクシーの件、お伝えしてきてもよいですか。」

私は、改札のある二階から階段を降りると、バス停に戻った。私の急いだ説明に、白河駅に行きたい持田さんとバス停で時間を調べに来た留学生のヤンさんが乗車することになった。私は二人の乗車を知らせに、改札口に急いだ。これで家に戻れる。

大急ぎで宗像さんに「二人乗ります。これで六人です。」と告げると、当初、私が誘ってくる人は一人だと思った宗像さんたちが声をかけて、すでに一名乗ることになったと告げられた。これでは、七人になってしまう。私は、混乱した。

「みなさんで先に行ってください。私は、次のタクシーを予約します。」

「いや、初めに声をかけて乗ると約束したのはあなただ。あなたには乗る権利がある。」

「でも、私は、バス停で、タクシーには、あと二人乗れると約束してしまいました。私の分は、その方に乗っていただいて構いません。」

そのとき、山口さんが言った。

「タクシー会社の電話番号を教えてくれないか。私は、岩手で一番遠い。この方といっしょに、次のタクシーを待つことにしよう。これならみんなが気に病むことはない。」

宗像さんが、少し考えてこう言った。

「では、今からタクシーをもう一台追加できないか聞いてみることにします。タクシー会社もつながりにくい状態です。電話をかけ続けてみます。」

私は、みんなの家路を遅らせてしまうかも知れないことが申し訳なく、いたたまれない思いでいっぱいだった。ペットボトルの水は、もう三分の一もない。

「タクシーが、もう一台来てくれるそうです。」

宗像さんの弾んだ声が響いた。私は、一瞬すべてが許された感じがした。

後から聞いた話だが、最初に声をかけてくださった宗像さんは、大手電機メーカーで、乾電池の研究をしているとのこと。岩手に帰る山口さんは、石油タンカーに乗って、つい先日、日本に戻ったばかりだ。福島市在住の吉田さんは、埼玉の実家から自宅に戻る途中らしい。ベトナムからの留学生のヤンさん。米沢に行きたい大和田さんは、奥さんに間もなく赤ちゃんが生まれるとのこと。香港に一週間の出張で、大震災直後に着陸した飛行機で一夜を過ごした佐藤部長と菊地さんは、製薬会社に勤務していた。その後も、宮城に帰りたいご夫人を入れて、合計十人で、北をめざしてタクシーに相乗りすることになった。

三月十三日（日）午後二時三十五分。

ようやく車窓から見えたのは懐かしい風景だが、緊張感が走る。信じられないほど人通りが少ない。郡山駅周辺は、閑散としていた。

タクシーを降り、精算した。「二人で帰ったと思えば、はるかに安い金額だ。」と言って多めに支払ってくださった佐藤部長。「おつりはいいよ。」と言ってくださった大和田さん。気がつけば、タクシー代をお支払いしても残金が出た。私は、思わず宗像さんに「郡山より北に向かう人々に、旅費としてお渡ししましょう。」と提案した。その場にいた誰もが快く頷いてくれた。

それからは、夢中で米沢、仙台方面に向かってくれるタクシーを捜した。ロータリーにプールしている小型タクシーに事情を話すと、福島市まで行ってくれるという。米沢まで行ってくれるというタクシーも見つかった。

山口さんは、別れ際に、くしゃくしゃの名刺を私に握らせた。

「一番遠い私がたどり着けば、みんなも無事に着いたと考えられる。タクシーを乗り継いで、私は家をめざして行くよ。あなたは、見知らぬ人のために席を譲って、車を降りると言った。しかし、諦めなかったからこそ、こうしてみんなで前に進むことができた。本当にありがとう。」

山口さんの乗ったタクシーを見送って、私はペットボトルの水を飲み干した。ここからは一人で歩いて帰るのだ。住み慣れた大好きな街は、あちこち倒壊して、今、傷だらけである。とにかく前へ進むしかない。私は、何か大きなものにつき動かされていた。

昨日のみぞれ交じりの曇り空は一転して、雲一つ無い青空だった。私は生きている。そんなあたりまえのことを実感した。

山口さんが別れ際にくれた名刺は、今でも大切に手帳に収められている。いつか会いに行くつもりだ。電話の向こうの涙声が、今も耳に残っている。

「ありがとう。あなたには、無事にたどり着いたと伝えたかった。」

（「教材作成委員会」作成）

海へ

あの日、私は小学校にいて、みんなと一緒にうら山にいちもくさんに駆け上がった。父は祖母と姉を乗せて、必死で車を走らせた。それにもかかわらず、大津波は父の車をすっぽりと飲み込んでしまったという。

祖母と姉は遺骨となって避難先の仮設住宅に戻ってきた。海辺にあったお墓は流されてしまったので、新しいお墓を建てるまでは、祖母と姉の遺骨が二つ並んで父と私の生活を見守ってくれている。私はうれしい時つらい時、いつも二人に話しかけて過ごしてきた。幼い頃に母を亡くした私にとってかけがえのない存在だった。

「私の分までお線香あげてきてね。」

一時帰宅して、お墓参りに行くという父に声をかけて送り出した。警戒区域に私の家はある。

帰宅した父は、つぶやいた。

「いやぁ、みんな流されてたよ。テレビで見たのと一緒だ。あの日から何にも変わってねぇ……。」

父のため息まじりの言葉に相づちを打ちながら、もう帰られないのかな……ぼんやりと考える。

「何もかもなくなってたよ。だがな、手作りの慰霊碑が一つあって、そこで線香あげたんだ。そこには「力水[1]」が一本おいてあってな、いやあ、なつかしかったなあ。だれかが供えてくれたんだな。」

出初式や安波祭[2]でふるまう地元の酒を、船方たちは『力水』と呼んで大切にしてきた。

「仲間と漁の話をしてたら、うれしくなってな。全部なくなったけれど、海のにおいはするしよ。なんだか、

① 大漁だった漁船に漁業組合から贈られた地元の酒。

② 昔から受け継がれている海の安寧を願う祭事。

また海に出てえなあって思ったんだ。美咲。父ちゃん、いつかまた漁に出て、③請戸のうまい魚を食わしてやるからな。」

「……そんなのいらない。」

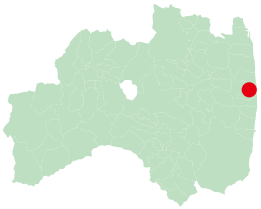
父と言葉を交わさない日が続いた。

震災の起きたとき、家族の安否もわからないまま、友達の家族と避難することになった。早く家族に会いたい、それだけを願っていた。やっと父と再会できたのは一週間後のことだった。父は私を見るなり、ぎゅっと抱きしめて大きな声を上げて泣いた。しかし、祖母と姉はあの日の荒れ狂う海にさらわれてしまった。私はあれから海なんて一度も見ていないし、見たいとも思わない。それなのに、なぜ父はまた海にでたいというのか、私たちの大切な家族を奪ったあの海に……。

私は父の気持ちがまったく理解できなかった。

そんな私の気持ちをよそに、父はまた昔の仲間と電話で話をしている。気になって聞き耳を立ててしまう。どうやら父は船を探しているらしい。私は、父に反旗をひるがえすかのように、わざとふすまをバチンと閉めて居間を出た。

その晩、父の漁師仲間の源太さんが訪ねてきた。私は隣の部屋でそっと耳を澄ます。



③ 浪江町請戸

「『力水』が手に入ったから、供えてやって。」

父はこの心遣いをとっても喜び、祖母と姉の遺骨の前に丁寧に供えた。

「漁から手ぶらで帰ると、『魚捕るまで家に帰ってくるなよ』って、ばあちゃんによく怒られたもんだ。でもな、大漁でこの酒を持って帰ると、ばあちゃんは上機嫌でな。」

父のはずむような声が響く中、源太さんがぼそっとつぶやいた。

「今ごろは、スズキやイナダが捕れるじきだなあ。でも、もう船はないしなあ……。」

「実はな、今、船を探してるんだ。」

また、あの話だ。

「俺だって漁には出たいけどな、あの日のこと思い出すとなあ……。」

源太さんの声は沈んでいた。

「やっぱり海に出ないと寂しくてならねえんだ。こうやっていると、『何やってんだ。早く漁に出て、魚捕ってこい』ってばあちゃんの声が聞こえてくるようでよ。俺はいつか漁に出て、港に大漁旗をなびかせたいんだ。うまい魚をうんと捕って、港のみんなに食べさせてやりたいんだ。」

父は力強く言い切った。

夜が明けないうちから毎日漁に出ていた父。ふと父と過ごした

請戸の生活がよみがえってきた。威勢のいいかけ声が響き合う港のにぎわい。正月、色とりどりの大漁旗に胸躍る出初式。安波祭で奉納した田植踊り④。食卓には、いつも父が捕ってきた魚料理があった。あのころの家族みんなの笑顔が次々と浮かんでくる。あの日から父の思いに寄りそうことができなかったけど、父にとっての海ってなんだろう。

源太さんが帰って、また仮設住宅に静けさが戻った。私にできることは父の力水になることかもしれない。

私は大きく息を吸ってからふすまを開けた。

（「教材作成委員会」作成）

④ 安波祭の時、小学生が豊作を祈るために奉納する踊り。

あこがれの消防団

「健太、火の用心行くぞ。」

幼い頃、僕は、近所の消防団員によく誘われた。喜んでポンプ車に乗り込み出かけた。時々、鐘を鳴らすことができるのが何よりの楽しみだった。カランカラン、カランカラン。気分がとてもいい。

「お兄ちゃん、何で消防団やってんの。」

「何でかなあ。」

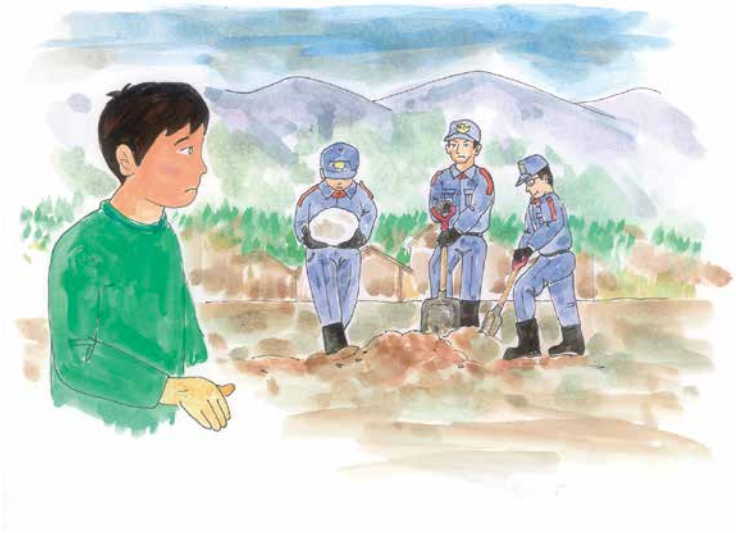
その時、若い消防団員は特別な理由は言わなかった。でも僕にとって消防団はあこがれの存在であり、ヒーローであることに変わりなかった。

『大きくなったら消防団に入る。』

と小学校の作文に書いた。

そんな憧れに影を落とす出来事が起こった。東日本大震災だった。ニュースでは連日のように津波に襲われた沿岸部の様子が流され、そこには、自衛隊員や警察官、消防士と共に活躍する消防団員の姿があった。救出活動や捜索活動に懸命に取り組む様子に胸が痛んだ。

大津波警報[①]発令直後、消防団は避難を呼びかけるため危険をおして沿岸部を巡回した。それにもかかわらず沿岸部の人々の中には、逃げおくれて命を落した人たちもいたことに、無念の涙を流す消防団員の様子を



① 大きな津波が予想される場合に気象庁から発表される警報。

見て、僕はいたたまれなくなった。

「あの時、避難をするようもっと強く呼びかけていたら……。」「無理にでも避難させていたら……。」と後悔の思いを語り涙する消防団員もいるという。僕の体から力が抜けていった。（消防団ってこんな思いをする仕事なのか……）

その年の七月二十九日。ふたたび自然の脅威を見せつけられることとなった。②記録的な集中豪雨が僕の町をおそった。一時間に一一〇ミリの記録的な雨量。家屋の全壊・半壊は一四二棟、浸水家屋は一四九棟。孤立した住民は九つの集落で四三八人。町の被害額は数億円となった。また、電気や水道といったライフラインの全ての復旧には数週間を要した。そして、唯一の鉄道路線の鉄橋が流され、③「只見――会津川口」間が不通となった。

「早く本家に逃げろ。」

ずぶぬれで帰ってきた父の叫び声が聞こえたが、雨音にかき消された。バキバキッ、ゴロゴロッ。雷のような音。山が動いている。父の背後には土砂の塊が押し寄せていた。土砂の塊は、またたく間に隣の家のビニールハウスに襲いかかった。森の一部はけずりとられ、なぎ倒された大木が道をふさいだ。

本家で不安な一夜を過ごした翌朝、家のある川の向こう岸には信じられない光景が広がっていた。

「誰か、いませんか。」

消防団員は泥まみれになりながら、うもれた家屋に向かって叫んでいた。

その数日後、雨があがって、ようやく家の中の土砂出し作業が開始された。毎日のように家族が囲んだ茶の間のテーブルなど、家具のなにもかもが泥だらけの無残な姿だった。泥をかき出していくと仏壇にあげて

② 「平成23年7月新潟・福島豪雨」新潟県中越地方、下越地方、福島県会津地方の三地域で発生した集中豪雨。

③

あった僕の通知表まで中にうまっていた。終わりの見えない作業が始まった。沈黙の続く作業、スコップを持つ手はこわばり、ときおり中断する重苦しさの中、何度も投げだしてしまいたいという思いにかられた。僕たちの家族は、朝からのきつい作業で疲れ、憔悴(しょうすい)しきっていた。

その日の午後、消防団が手伝いに駆(か)けつけてくれた。

「大変だっただろう。後は俺たちに任せて休んでくれ。」

「済まねぇなあ。」

父が礼を言うと、

「④さすけねぇ。さすけねぇ。」

力強くスコップを持つと土砂を片付けはじめた。家財道具を水で洗い出す。畳を外に干す。泥や瓦礫(がれき)をかき出しては運び出す消防団の姿が震災の映像で見た、あの時の消防団の姿と重なった。全く同じだった。今現実に目の前にある。

(これが消防団か……)

先が見えないと思っていた作業が、次々に進んで、僕たちの家族にようやく光が見えてきた。

数日の間、朝から晩まで、彼らは僕らと一緒に作業を続けた。

「ぼうず無理するなよ、つかれたべ。」

顔を合わせると、いつも声をかけてくれた。そのたびに心があたたかくなる。そして、同時に消防団の姿にあこがれた。

④ どうってことないよ(差し支えない)

消防団は職業ではなく、みんなそれぞれ別の職業についている。だれかに強制されたわけでもなく、自らが望んで集まっている集団である。自分の生活をなげうって、こうして僕たちの家族を助けてくれていることを父から聞いた。

ようやく、家の中の泥は取り除かれ、家の周りにあった十メートル以上あろうかと思っていた土砂もついにはなくなった。

あれから三年、僕は中学三年生になった。今、普通の生活を送れるのもあの人たちの助けがあったからだ。あの数週間の困難を消防団の人たちと乗り越えた経験は、僕にとって一生忘れられないできごとになっていた。

今年も豪雨災害に見舞われた地域の様子がニュースで報じられている。そこには懸命に働く消防団員の姿が映し出された。あの時の消防団の姿と重なり僕の気持ちは熱くなった。あの困難な状況の中、笑顔で作業をやり遂げ、「さすけねぇ」と言って僕たちを安心させてくれたのは、消防団の人たちだった。

いつか僕もその一員になれたらと強く思う。

（「教材作成委員会」作成）

When in Rome, do as the Romans do.

アメリカで生まれ育った僕が日本に来たのは、大学を卒業してすぐのことだった。日本の伝統、特に武道に興味をもった僕は、大学で日本文化を専攻し日本語教師になろうと決めた。日本に行くと決めたときは、両親から猛反対を受けた。飛行機の事故にあうのではないか、病気になっても誰も助けてくれないのではないかとか、心配する母を、僕は必死に説得した。必ず日本の文化を学びアメリカで日本語の教師になるという夢を実現するために。

八年前、僕は、福島県の小さな町にALT①として派遣された。そこで友達となったライアンが、日本の生活についていろいろと教えてくれた。

「僕は、三年かかってやっと日本の生活に慣れてきたよ。」

髪も目も肌の色も違うライアンにとって、言葉が通じなければ、コミュニケーションをとるのも難しい、よほど苦労したのだろう。

でも僕は違った。自分から町の人たちに話しかけ積極的に友達をつくった。剣道や弓道、居合道などにもチャレンジした。野菜がとれたと言ってはおすそわけをもらい、イベントがあれば必ず誘ってくれた。町の人たちと親しくなるのに時間はかからなかった。日本人の温かさにふれた僕は、後輩のALTが悩んでいると、いつもこう言って励ました。

「ここは日本さ。『When in Rome, do as the Romans do.（郷に入りては郷に従え②）』自分から入っていかないとだめだよ。」

① 学校に配属された外国語教育助手の外国人。

② 新たにその土地に住もうとする人はその土地の風俗・習慣に従うべきだという意味。

その後、五年が経ち、僕は日本でやりたいと思っていたことが次々と実現し、その喜びに満足していた。地元の道場で学んだ剣道や弓道、居合道の腕も上がってきた。そんな僕の心を大きく揺るがす出来事が起きた。三月十一日の東日本大震災である。

その日から、大きな余震におびえる生活が続いた。その上、原子力発電所の事故の影響で流通が滞り、スーパーマーケットやコンビニエンスストアの店先からは食品が消えた。ガソリンがないので遠くまで食料の調達に行くこともできなかった。（ああ、今夜は何も食べずに寝るしかないか……。いつになったら元の生活が戻ってくるのか。）

母国の両親からは毎日のように電話が来ていた。飛行機嫌いの母は一度も日本に来たことはない。遠く日本で起こった大地震のニュースを両親はどんな思いで聞いていたのだろうか。

「今すぐ帰ってきなさい。みんなどれだけあなたを心配していると思っているの。」

電話口で母は叫んだが、僕は何も答えられなかった。

僕はもうこの町には住めないのではないかと真剣に考えた。日暮れとともに、しんしんと冷えるアパートの一室で、僕は一人で過ごす孤独に耐えきれず、外へ出た。町はひっそりと静まり返っていた。当てもなく歩いていると、震災前からよく行っていた定食屋に灯りがともっているのに気付いた。僕はすがるように店の戸を開けた。

「いらっしゃい。大丈夫だったかい。」

店のおばちゃんの以前と変わらぬ明るい声が響いた。店内には、いつものように常連の客が迎えてくれた。

「いつまで営業できるか分からないけどね。」

おばちゃんはそう言って、目の前に炊きたてのご飯と大根の煮物、白菜の漬物を出してくれた。常連の吉田さんが言った。

「米と味噌なら持ってくるぞ。」

隣の席に座っていた役場の佐藤さんからも声をかけられた。
「ここに住めなくなったら、一緒に親戚の家に避難しましょう。」
「ありがとうございます。」
「こんな時こそ、みんなで助け合わないとね。お互いさまなんだから。」
おばちゃんがからからと笑う。僕は、この町の人の温かさを肌で感じた。

僕は悩んでいた。母親は、よほど心配しているのだろう。ひっきりなしに電話がかかってくる。友達の多くが帰国していった。ここにこのままいても、僕は仕事を続けることができないだろう。これで、僕の夢も終わってしまうのか。

決心がつかず迷っているころ、あゆみと出会った。僕が勤める学校に震災のために転校してきた女の子だ。彼女はいつも悲しそうな表情をしていた。故郷の友だちと離れ、さらに父親と離ればなれになり母親と二人で暮らすあゆみが、家族と離れて日本で暮らしている自分自身と重なり、僕は声をかけた。
「僕も家族と離れて暮らしているんだ。もう五年も帰ってない。」
あゆみは、僕をまっすぐに見つめて言った。
「先生も同じなんですね。寂しくないんですか。」
このとき僕の頭の中に、夢や希望を持って日本に来た日のことや剣道や弓道、居合道に夢中になった日々が浮かんできた。
あゆみに自分の夢や夢中になれるものがあることの喜び、真剣になって武道を教えてくれる人たちについて話をした。そして、災害にあっても笑顔で励まし合い、僕を支えてくれる人たちが、この町にいることも。
「不安を恐れてはいけないよ。『When in Rome, do as the Romans do.』、日本では『郷に入りては郷に従え』という意味だよ。自分から声をかけてごらん。」
遠慮がちにあゆみが近づいてきた。

「私にも、友だち出来るかな。」
「僕は君の最初の友だちだよ。」
不安そうなあゆみの肩をポンとたたいた。
「先生、ありがとう。私、がんばっていけそうな気がします。」
あゆみの表情が少し明るくなった。
「なあに、お互いさまだよ。君のおかげで僕の心が決まった。」

僕はその夜、両親に国際電話をかけた。
「ごめんなさい。僕はまだ帰らない。」
父は落ち着いた声で僕に言った。
「お前の気持ちは分かったよ。日本がそれだけ好きなんだね。そしておまえがやるべきことが日本にあるんだね。」

あれから三年。僕は今もこの町で、明るい子どもたちの笑顔に囲まれている。

（「教材作成委員会」作成）

墓印（はかじるし）

「早く起きなさい。今日はお墓参りだからね。」
母の声で目が覚めた。八月十三日は、お盆のお墓参りの日だ。
「僕、行かない。眠いし、寝ぼけた顔では、ご先祖様に顔向けできないよ。」
「なにを言ってんの。早くお花持って行くわよ。」
と、母が言った。祖父も、追い打ちをかけてくる。
「今お前があるのは、ご先祖様のおかげなんだぞ。長男なんだから早く支度しろ。」
長男だからなんて、今の時代全く古くさい。だいいち僕はこの村で一生を過ごすなんて考えたこともない。
僕は、お供えの花を持って、眠い目をこすりながらみんなの一番後についていった。

僕の家は奥会津（おくあいづ）の山村に代々続く農家だ。ここは、日本有数の豪（ごう）雪地帯で多いときは雪が三メートル近く積もることもある。

坂を登ってお墓に着いた。その時、祖父と父が急に立ち止まった。墓石の近くの枯れた四メートルほどの細い立木を、驚いたように見ているのだ。
そして父は僕に、
「家に帰って、ばあちゃんにナタを借りてきてくれ。」
と言った。僕は、父の怒ったような顔つきに驚いて、急いで家にもどった。

「こんな、縁起でもねぇ。」

父がナタを振るい、枯れ木は根本から切られ、お墓の後ろの林に捨てられた。

僕は縁起が悪いという言葉が気になってならなかった。

家に戻って、祖父にあれはなんだったのか聞くと、祖父は一言一言をかみしめるように語り始めた。

この村にはなあ、墓印という風習があってな、さっきの枯れ木みたいに、お墓に杉の細木を立てたんだ。

昔は冬の除雪が十分でなかったからな、冬を越えられなさそうな病人や年寄りのいる家では、雪が積もる前に印の棒を立てたもんだ。もしものことがあった時、お墓の場所が分かるようにするためだ。冬になると何本かはお墓に立ってたもんだ。

昔は土葬だったから冬の墓穴掘りは大変だった。まず雪でなんにもわからなくなってしまって、埋める場所を探すことがとっても難儀だった。そして土が出てくるまで半日は雪掘りだ。その後、凍った堅い土を掘り始めたんだ。葬式をやるには村中で協力してもらわないと、とてもじゃねぇが、できなかった。冬の葬式は家族にとっても村の人たちにとっても大変なことだったんだな。墓印は村中に近々葬式があるぞっていう、

御触れの意味もあったのかも知れねえなあ。

実はな、俺も母親の墓印を立てたんだ。二十年も前の話よ。お前の曾ばあちゃんのだ。

曾ばあちゃんは、今でいう脳梗塞①だったと思うんだが、右の手足がうまく動かなくて長患いしてた。

それがだんだん御飯も食べられず、ほとんど寝たきりになってしまったんだ。

ある日、枕元に俺を呼んで、「今年の冬は墓印を立ててくれ。」って言ったんだ。

俺は、「まだ大丈夫だから。」って断ったが、曾ばあちゃんはどうしてもってきかなくてな。

困っている俺に曾ばあちゃんは、こう言ったんだ。

「私を安心してじいさんのところに行かせておくれ。おまえが墓印を立ててくれるのが一番の親孝行なんだからね。」

なにかと引き延ばしてはいたが、雪が降り始めたから仕方なく細木を背負ってお墓に行った。墓印を立ててはみたんだが、なんだか親の死を目前にしてるようで、こんな辛くて悲しいことはなかったな。

今年の冬はまだ連れて行かないで下さいって、何度も墓印に拝んだよ。

家に帰って曾ばあちゃんに報告したらな、「すまなかったねえ。これで、みんなに迷惑かけないですむよ」って言われたんだ。こっちがすまねえ思いでいっぱいなのにな。曾ばあちゃんは、自分のことより残される家族のことを一番に考えてたってことなんだな。

昔、この村は米も十分とれず、今のように生活にゆとりはなかったけど、命や家族をずっと大切に考えていたんだよなあ。

① 脳に酸素と栄養を供給している動脈が細くなったり詰まったりして、その先に血液が流れにくくなる疾患。

祖父は語り終え、ちょっと目頭を押さえた。その後、気を取り直すようにお茶を一口飲んだ。僕にとって祖父の話は衝撃（しょうげき）だった。

祖父はどんな気持ちで墓印を立てたのだろうか。正直言って、僕には十分理解できない話だった。

僕はまだ肉親の死というものに直面したことがない。だけど、この村に生きる人間として忘れてはならない大事なものを、教わったような気がした。

送り盆の日、僕は先頭でお墓に向かった。今日は目的があった。曾ばあちゃんがいつ亡くなったのか、僕はこの家の何代目に当たるのか、墓誌（②ぼし）を見て確かめてみようと思ったからだ。

墓印は豪雪（ごうせつ）に見舞（みま）われるこの村ならではの風習だったという。

（「教材作成委員会」作成）

② 墓石に刻まれた死者の経歴。

命のおにぎり

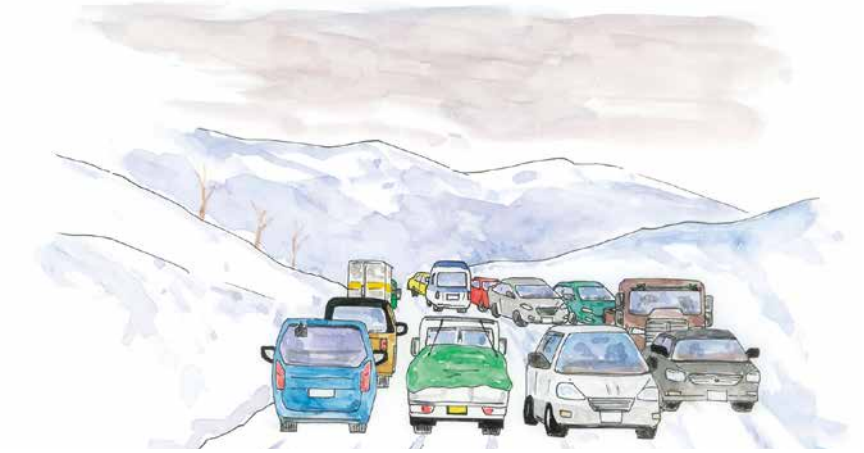
「おい、見てみろ。あの日のおにぎり、これじゃないか。」

父に言われて、新聞をのぞき込んだ。一緒に読みながら、僕は、あの雪の日のできごとを思い出していた。

大粒の雪は、一向に止む気配はない。車は、いつの間にか渋滞に巻き込まれていた。

今日は祖母の誕生日だ。入院して一人でさびしがっている祖母をお祝いするため、ケーキを持って父と出かけた帰りだった。車の中で、しばらくは、父と祖母の話をしていたが、車はなかなか動かない。このまま家ににたどりつけないのではないかという不安にかられる。父は、さっきからラジオのニュースに聞き入っている。大雪警報が出されたようだ。

病院を出てから二時間が経過していた。ガソリンは心配ない、三年前の東日本大震災の時に苦労した経験から、いざというときのため、ガソリンをいつもいっぱいにしていた。車には毛布、カイロ、飲料水まで、非常用品を積んでおく習慣もついていた。しかし、食料だけは



積んでいなかった。出がけに母からおにぎりを持っていくよう声をかけられたが、すぐに帰るからと断ったことが悔やまれた。

雪は、いっそう激しさを増していった。すでに夜の十時をすぎていた。眠くなってきたが、おなかがすいていてすぐ目が覚めてしまう。パン一切れ、チョコレート一粒だけでもいいから口に入れたい。何も食べられず、我慢することが、こんなにつらいとは……。

僕たちはそのまま車の中で朝を迎えた。

トントントン。その時、窓ガラスをたたく音が聞こえた。窓を開けると、発泡スチロールをかかえ雪だらけになった小柄なおじいさんが二人立っていた。吐く息が白い。

「こんにちは、すごい雪ですねえ。おなかすいたでしょう。おにぎり作ったんで食べてください。」

「えっ、私たちにですか。」

「ええ、みなさんへの恩返しで作ったんです。大変でしょうが、がんばってください。雪も、いつかは止みますから……。」

おじいさんは大きなおにぎりを僕と父に一つずつ渡してくれた。

「ありがとうございます。本当に助かります。」

父は、何度も頭を下げていた。

おにぎりは、ほんのり温かかった。僕たちは、一口一口かみしめるように食べた。これまで食べた中で一番おいしいおにぎりだった。二人で顔を見合わせると笑みがこぼれた。

でも、恩返しって何なんだろう。こんなに寒い雪の中、見も知らぬ僕たちのために……。僕は、不思議で

ならなかった。

新聞を読み終えて、僕は言った。

「あの時のおにぎり、これだったんだね」

「どおりでおいしかったわけだ」

父と顔を見合わせた。あの日のおにぎりの味が思い出された。

（「教材作成委員会」作成）

水道部隊の軌跡

当時、私は、いわき市の南部にある水道局事務所に勤務していた。

三月十一日　十四時四十六分、東日本大震災発生

突然激しい揺れが襲い、いたるところで断水が発生した。

「事務所より二号車、応答願います。大丈夫でしたか。」

「こちら二号車、異状なしです。」

無線の声は興奮ぎみだった。職員は全員無事だった。しかし、電話はつながらず、市内の様子がどうなっているかはまったく知ることができなかった。後から聞いたことだが、市内はほぼすべての地域で漏水[①]が発生し、ライフライン[②]の一つである水道が壊滅状態となっていたのだ。私たちは、この時から果てしない戦いへ挑むこととなった。

「浄水場[③]より事務所、どうぞ。」

「はい、こちら事務所、どうぞ。」

「何とか取水[④]はできるようになりましたので、間もなく送水可能です。」

「了解。準備ができるまでそのまま待機してください。」

担当地区が被災し、ほぼすべての家が断水状態だった。まさにゼロからのスタートとなった。所長である私

上水道のしくみ

① 水道管が破損し水もれが発生すること。

② 電気、ガス、上下水道、電話、交通、通信などの日常生活を支えるためのシステム。

③ 河川や地下から取り込んだ水などを浄化・消毒し、上水道へ供給するための水道施設。

④ P五六下図参照。川や井戸から水を取り込むこと。

は、今後の復旧作業の検討を求められた。

「現在、たくさんの漏水している水道管があるはずです。それを修理しながら給水地域を広げていくしかないですね。」

次長がそういうと、技術員の酒井（さかい）さんが口をはさんだ。

「ちょっと待ってください。すべての漏水を直していたら、先へすすめません。」

「迷っているひまはない。とりあえず、漏水のある水道管は断水して水を送ることを優先させよう。」

一方、復旧工事と同時に地域住民のために飲み水を供給することも急がなければならなかった。市内の水道局には非常用の給水車を何台か備えていたが、それだけではとても足りなかった。

「所長、他県から応援の給水車が三日以内に到着するそうです。」

「それは、ありがたい。給水を待っている住民が大勢いる。それまではなんとかがんばろう。」

自分たちだけでできるのか自信はなかったが、今はそう自分に言い聞かせるしかなかった。

浄水場送水管漏水の修理

三月十二日　地区住民への給水開始

給水車が巡回（じゅんかい）し、水を届けはじめた。どこへ行ってもすぐに長い列ができた。

電話も復旧し、静まりかえっていた事務所に問い合わせが殺到（⑤さっとう）した。「いつ水道が出るのか。」「どこに行

⑤ 多数の人や物が一度にどっと押しよせること。

けば水がもらえるのか。」電話は鳴り止まなかった。
「できるだけ早く水がでるように作業していますのでもう少しお待ちください。」
「給水車は近くの中学校へ行きますので、そちらで水をもらってください。」
息つく間もなく次の電話が鳴った。非常事態に技術者として蓄積してきた経験や知識のすべてがガラガラと崩れていく思いがした。

水道局での応急給水

三月十三日　緊急事態発生

現状に追い打ちをかけた。
「所長、たいへんです。原子力発電所で爆発が起きたそうです。」
「爆発だって……、被害状況は……。」
職員にも動揺が走った。放射能汚染の不安から市外へ避難する工事業者もでてきた。
「えっ、中止ですか。はい、しかたがありません。連絡を待ちます。」
「所長、どうかしましたか。」
「原子力発電所の事故により、他県からの応援部隊の派遣は中止だそうだ。」
「そんな……。われわれだけでは無理です。工事業者もほとんどいないですよ。」

「すまない……。」
「修理資材を積んだトラックが、県境の手前でストップしているそうです。」
「ガソリンがなくて、給水車が動けません。」
悪い知らせがこれでもかと続いた。
（限界か……。）

職員は不安を抱えながらも一日も早い復旧のために現場に出ていた。
落ち込んでいる暇などない。私たちにはやるべきことがある。
私は黙々と復旧作業を行う職員のために、食べものを集めようと奔走⑥した。
「友達の家から水をもらってきたわよ。ごはんを炊いておにぎり作るからね。」
妻も応援してくれた。
「ああ、そうしてくれ。助かるよ。」
さらに開いている弁当屋をさがしたり、農家の友人に頼みこんでお米をもらったり、いつしか職員の食事を確保するのが私の大切な仕事になっていった。
そんな矢先、仙台にいる息子とはじめて連絡がついた。震災から四日後のことだった。全身の力がぬけるのを感じた。

三月二十一日、応援の給水車到着

多くの方の応援があり、作業が劇的にはかどった。これならいける。明るい兆しに全職員が、さらに士気を高めて自分の任務に取り組んだ。

⑥ 物事がうまくいくようにあちこちかけまわること。

四月十一日　震災から一ヶ月経過

避難していた工事業者がもどり、復旧工事の現場は少しずつ活気づいてきた。

「今日でもう一ヶ月だ。復旧まで三ヶ月かかると思ってたが、みんなのおかげで早く進んだ。ごくろうさま。」

「がんばった甲斐がありましたよ。所長。」

技術員の酒井さんが言うと、他の職員からも笑顔がこぼれた。

帰宅しようとしたそのとき、地鳴りとともに激しい揺れに襲われた。震度六弱の余震だった。全域復旧まであともう少しというところで、また、ふりだしにもどった。

「すまない……。出動だ。」

「まかせてください。」

返事が事務所内からかえってきた。さっきまで和んでいた空気が一瞬にして緊張に変わった。

四月二十六日　沿岸地区の給水作業開始

全国からの給水応援

「水だ。水が出たぞ。」
「こっちもでたよ。」
「顔が洗えるね。」
「ご飯もたけるよ。」
そんな声があちこちで聞かれた。
事務所には、問い合わせだけでなく応援や励ましのメールも次々と届いた。

『住民の笑顔のために、がんばってください。
世界一の水道部隊にエールをおくります。』

（原作　日本水道新聞連載「三・一一水道部隊の軌跡」金成恭一　「教材作成委員会」改編）

それでも僕は桃を買う

夏休みのある日、僕は、家族といっしょに旅行することになり、一路、新潟を目ざして車に乗っていた。

朝早く家を出発し、東北自動車道から磐越自動車道に入り、サービスエリアで休憩をとった。サービスエリアの売店にはたくさんのお土産が売られていた。その中に、福島県特産の桃が並んでいた。その桃を見て、無邪気な子どもが母親に「桃食べたい。」とせがんでいた。しかし、その子どもの母親は「だめ。」と子どもに言い聞かせようとする。子どもも引かず「なんで。」と反論する。すると、母親は「だって、この桃、福島産だよ。放射性物質っていう良くない物がついてるかもしれないからね。」と説きふせたのだ。しぶしぶ諦めた子どもの姿を見ながら、僕は、心の中に何かひっかかりを感じていた。

車に戻り、走り始めた車の中で、僕は両親にさっきの出来事を話した。父は「やっぱり放射性物質がついていないとは言い切れないからな。」と言い、母も「確かに心配ではあるね。」と言った。これまでの自分を振り返ってみると、僕も同じような

ことをしていたことを思い出した。僕の住んでいる地域のスーパーマーケットでも、「福島産」と表記されていると、どうしても避けてしまうことがあった。しっかり検査を受けて市場にでていると分かっていても、なんとなく不安だったからだ。サービスエリアの出来事にひっかかりを感じてはいたが、僕はそのことを忘れようと思った。

しかし、僕の頭から、「だって福島産だよ」という言葉が離れることはなかった。なぜ、そんなにも、その言葉が気になるのか、僕は、旅行中、ずっと考え続けていた。そして、思い当たった。僕が小学五年生の時に友達から言われた、あの言葉と同じ、嫌な響きを感じたからだ。

小学五年生の時、僕は仲のよかった友達と大げんかした。理由はささいなことだったが、言い合いはとまらなくなり、とうとう互いに相手を罵倒するようになった。その時、最後に友達が僕にこう言ったのだ。

「黙れ。中国人。」

僕は中国生まれの日本育ちだ。日本に来てからずっと、自分が中国国籍であることを表に出して生活してきた。そのことに対して、友達の誰も触れることはなく、僕も中国国籍であることを気に留めることはなかった。

しかし、あの時、その友達の言葉は、鋭利な刃物となって僕の心に突き刺さった。そして、自分は他のみんなと違うんだと切なくなった。仲の良かった友達が、心の中では僕を差別していたんだと感じ、悔しくてしかたがなかったのだ。幸い、友達とは仲直りすることができたが、しばらく、あの友達の放った言葉は、僕の胸をひっかき続け、嫌な響きとなって耳の奥に残っていた。

その嫌な響きと同じものを、「だって福島産だよ」という言葉に僕は感じたのだ。僕の場合は、中国という国のことを知りもしないのにばかにされ、福島の桃は、放射性物質のことをあまり知らないのに、危ない

と決めつけられ、自分と桃が重なって見えたのだ。風評被害という言葉は知っていたが、この時、僕は、福島の桃は、被害ではなく、「差別されているのだ」とはっきりと感じた。

だから、僕は、桃を買うことにした。僕は差別される側の気持ちを知っている。それなのに、その僕が、知らず知らずのうちに、他の人と同じように福島県産の桃に偏見をもち、差別していた。それは、桃だけにとどまらず、福島の人々を差別していることにもなるのだと気づき、これではいけないと思ったからだ。

新潟からの帰り道、僕は、磐越自動車道のサービスエリアで、桃を買った。それは、もう偏見をもたない、差別などしないという、小さいけれど大きな僕の決意でもあった。

二十一世紀の今、日本そして世界中のあちこちで、いまだに多くの偏見や差別が残っている。生まれた地域や肌の色、病気、そして、福島原子力発電所のように事故に関係するものなど様々だ。それらの偏見や差別の根本にあるのは、何なのだろう。僕は、警戒心ではないかと思う。よく分からないから、見えないから怖く疎ましく、自分から遠ざけようとする。その気持ちが、偏見や差別を生むのだ。

では、どうすれば、私達は警戒心をもたず、この世界から、偏見や差別をなくすことができるのだろうか。その鍵は、二つあると僕は考える。一つは、他の人のことをよく知ろうとする姿勢。もう一つは、他の人の気持ちを思いやる想像力。この二つが、未知のものへの警戒心を取り去っ

てくれる。

偏見や差別を、この世界からなくすことは本当に難しいかもしれない。けれども、二つの国の良さを知っている僕は、相手を知ろうとする姿勢と思いやる想像力をもち、周囲の人に接していこうと思う。いつかきっと、お互いを慈しみ合う世界になることを信じて。

（「第三十三回全国中学生人権作文コンテスト」生徒作文）

「モラル・エッセイ」コンテスト

作品集

今、伝えたいこと

北塩原村立第一中学校
三年　高畑　ゆこ

「お姉ちゃんに問題。生きるってどんなことか分かる？」

弟が不意に私に尋ねてきた。私は「今ここでごはんを食べていること」と答えた。弟は先生が大学でこの問題出るんだよって教えてくれたと笑っていたが私にはよく分からなかった。なぜこんなに簡単な問題を大学で出すのだろうと疑問に思った。たぶんこれが生きるについて考えるきっかけの一つになったのかもしれない。

二〇一一年三月十一日、日本に大きな影響を与える地震が起きた。たった一つの地震で万をこえる人たちの命がうばわれた。命というものはどんなにはかなくて小さなものなのかを私はこのとき強く感じた。でもその反面、命が生まれるときはどうだろう。二つの命から新しい命が誕生する。その二つの命が出会わなければ新しい命は誕生しない。私は命が生まれる、誕生することがきせきだと思う。そしてその誕生した命は、たくさんの人を笑顔にしてくれる。そう思うと命はとても大きいものだとも思える。命とは不思議なものだと感じた。

弟が私に尋ねてきたことは、答えが一つではないと思った。十人に聞けば十個の答え。百人に聞けば百個の答えが出ると思う。そうすると生きるって簡単なようで難しいと思った。だから私は、父と母からもらった命を大切にしていきたいと思う。命を大切にすることと生きるということは同じだと思うからだ。最近よくテレビや新聞で自殺や殺害したというニュースがある。私はそういう人間に伝えたい。もっと自分の命を考え大切にしてほしい。そして生きてほしいと。大震災で死にたくないのに命をうばわれた人がたくさんいたと思う。だからこそ今、生きている私たちが命を大切にし、生きていかなくてはならないと感じた。

ふくしまで生きる

郡山市立小原田中学校
三年　吉田　一翔

十三歳の春に僕たちを襲った東日本大震災から一年半が過ぎた。未だに大きな揺れがあり、あの時の不安と恐怖が心を揺らす。

震災直後、屋外での活動は三時間までと制限された。体育の授業も部活動も、放射性物質から体を守るためにマスク着用。青い空の下……思いっきり空気を吸って、思う存分駆け出したい。伸び伸び部活動もできない毎日にストレスがたまる。イライラしてくる。心が折れそうになる。……その度、「つらいのは僕だけじゃない。今は、ふくしまみんなが辛いんだ。」「ふくしまみんなが踏ん張っているんだ。頑張っているんだ。」……そう自分を制し、自分を励まして生きてきた。

十五歳の秋を迎え、今年も教室の窓からは黄金色に光る稲穂が見える。震災を乗り越え放射能汚染を乗り越えて、たわわに実った稲穂が、僕には誇らしげに見える。「どうか、この米が風評被害なんかにあいませんように。」と願いを込める。

今の僕にできること。それは、勉強に打ち込み、中学生としての時間を精一杯満喫し、当たり前の毎日に感謝すること。当たり前の毎日が、こんなに貴重で幸せな事なんだと……震災を経験し、身をもって知った。

僕にとって「ふくしまで生きる」とは、僕自身がたくましく太い根になり、成長を続けること。そして、大空に向かって幹を伸ばし枝を広げるように、将来の目標に向かって真っすぐに伸びていくこと、視野を広げていくこと。やがて、大人になった時、僕はしっかりと前を向き、ふくしまで必死に生きる人々の力になっていたい。「うつくしま　ふくしま」を取り戻す一端を担っていたい。

「うつくしま　ふくしま」を取り戻すまで、僕はふくしまで生きる。よみがえった「ふくしま」をこの目で見届ける。

震災について　――心温まる話――

福島市立北信中学校
二年　菅野　志保

あの日、校長先生は泣きながら、卒業証書を生徒一人一人に丁寧に渡し続ける。しかも、場所は小学校ではなく中学校。二千年に一度といわれるあの東日本大震災は、私達の春休みを強制的に長くした。中学校の入学式が終わった後行われた手作りの卒業式。校長先生の教員生活の中で、小学校から生徒を送り出してやれなかったのは、おそらく、私達の学年が最初で最後であろう。

大好きな校長先生。校長室というと、身構えてしまうが、瀬上小学校の校長室は違っていた。いつも、生徒でいっぱい。なぜかって。答えはみんなが知っている。毎日、朝と帰り校門に立って、生徒を見守っていたこと。授業中、校内を見廻っていたこと。生徒一人一人に心を配り声をかけていたこと。学校が終わると生徒が遊んでいそうな公園などを自転車で一人でパトロール。たまには、生徒達と一緒にサッカーをして身体を動かす。夏休みやゴールデンウィークにも自転車見廻りはかかさない。人に好かれるには、自分が相手を好きにならなければならないんだって身をもって教えてくれた。

卒業式の時、いろんな思いが去来した。平和で変化がない毎日がイヤだと思っていたけど、平和で変化のない毎日が実は一番よい。普通に生活するのが難しい日がくるなんて、地震前、一度も考えたことがなかった。一日一日、一人一人に感謝できるような気がする。考えること、学ぶこと、想うこと、願うこと、声をかけること、知ること、明るい未来を描くこと、今を生きること。人にはみんなでできることがたくさんある。涙は志・心・魂を成長させる。経験しないと学べないものだ。

私は、福島市のリフレッシュ事業で、復興めざましい、いわきの旅行に参加する。とても楽しみだ。未来を見よう。いつか必ずこうなってみせると力強く。

心を守る

いわき市立中央台南中学校
二年　小野　夏海

地震が起きた瞬間、私は下校の途中でした。おさまるのを待って急いで家に帰りました。メチャメチャになった誰もいない家の中で一人でいるのは怖くてしかたがなかったです。そして私は、小学校に戻ることにしました。そんな時に助けてくれたのが小学校の先生でした。先生は、

「お母さんは、もうすぐ来るからね。」

と言って私をなぐさめてくれました。先生にもお子さんがいて、本当は急いで自宅に帰りたいと思ったに違いないと思います。先生方は教室を開放し、余震が起こる中、やさしく私達を守ってくれていました。そして家族が全員そろった時には夜の七時がすぎていました。

次の日、楢葉の方達が避難してきた時も、先生は体育館へ誘導し、いろいろと活動していました。いつも、

「困っている人を助けるんだよ。」

と言っている先生方は実際に困難にぶつかった時、優しく手をさしのべていたのです。

それから私は「先生になって小さい子たちを守ってあげたいなぁ。」と思うようになりました。学校の先生になるために必要な勉強をしっかりして、立派な教員になると心に誓ったのです。そして、東日本大震災のことをたくさんの人に伝えて「命の大切さ」を次世代へ伝えると共に優しさや人を思いやる心を子供たちと育てていきたいです。

ただ泣いていた私も中学生になり、次にまた何らかの災害があっても、立ち向かえる心が出来ているつもりです。今度は私が子供たちを守ります。「泣かなくても大丈夫だよ。一緒にいようね。」あの時の先生のように……。

魔法の言葉

郡山市立緑ヶ丘中学校
三年　藤田　ももこ

「ありがとう。」

この言葉は言った側も言われた側も嬉しくなる、素敵な言葉です。私はこの言葉を伝えたい人がたくさんいます。家族、友達、先生…。たくさんの人と関わりを持っていると、感謝の言葉を伝えたい気持ちが増してくるのです。

両親には私たち娘のために働いてくれてありがとうと、妹にはいつも楽しげな笑顔で和ませてくれてありがとうと。友達には、いつも一緒にいてくれて、一緒に笑ってくれてありがとうと、先生方には、相談にのって下さってありがとうございます、と。

しかし、こう思っていても、感謝の気持ちを実際に直接、本人に伝える事は、勇気がいるものです。手紙なら、書くだけなので、伝える事は案外簡単です。ですが、感謝の気持ちを伝えるならば、やはり、勇気を持って本人に直接伝える事が一番ふさわしいのではないでしょうか。

日頃思っていても、なかなか伝える事の出来ない、この五文字。

「ありがとう。」

この感謝の言葉は人と人とをつなぐ、素敵な魔法のようなものと言えるでしょう。簡単に伝える事ができないからこそ、重みのある大切な言葉なのです。

私は、この素敵な魔法の言葉を積極的に相手に伝えていきたいと思います。そして、良い人間関係を作りたいです。そのためには、いつも感謝の気持ちを忘れないようにしたいと思います。

感謝の気持ちを伝える魔法の言葉。

「ありがとう。」

温かい通学路

天栄村立湯本中学校
三年　小山　真梨

私の住む天栄村湯本地区では、毎年冬になると、腰の高さを優に超える雪が降ります。朝になると多くの地域の人が自宅の前の雪かきをします。私もよく、朝早くに起こされて、母が出かける前に雪をきれいに掃いたりします。これは、そんな時に見かけた地域の方の話です。

その日は冬休みに入って間もなくの頃で、近年まれに見るほどの豪雪でした。朝早くに起こされた私は、若干不機嫌ながらも、道路側の雪かきをしていました。まだ夜明け前で薄暗い中、私は一人のおじいさんを見かけました。その方は、私の家から少し離れた山の近くに住んでいるおじいちゃんで、夏によく、バイクに乗っている方でした。その方が行っていたのは、私の家の近くにある歩道の雪かきでした。祖母に聞くと、そのおじいちゃんは、毎日同じ時間にこの歩道の雪かきを行っているということです。

おじいちゃんの家は、この歩道からけっして近くはありません。家の前の雪かきもしなくてはならないはずです。ましてや八十過ぎのおじいちゃん、雪かき用の道具を持って歩いてくるのもつらいでしょう。けれどそのおじいちゃんは、毎日、私たちや小学生、地域の人が歩く歩道をきれいに歩きやすくしてくれているのです。

私の住んでいる地域では、このようなことをしてくれている人はおじいちゃんだけではありません。歩道の近くの花壇に春になると花を植えてくれるおばあちゃん、通学路の土を掃いてくれるおじさん、歩道に出ている木を切ってくれるお兄さん。誰も強制されているわけではありません。自分から進んで行っているボランティアなのです。私もそんな大人になりたいと思いました。

私の使っている通学路は、地域の人たちに守られている温かい通学路です。

父の初恋

白河市立表郷中学校
一年　渡邊　貴仁

僕は、父にこんな話を聞いたことがあります。それは、父が若かった頃の話です。

たくさんの人が行き来する郡山駅でのことです。切符売り場の人ごみの中に車いすに乗った一人の女性の方を見かけました。その人は、何か困っている様子で、しきりに周囲の人に話しかけているようでした。しかし、障がいを持ったその人の言葉は聞き取りにくく誰もその人にかかわろうとせずに通り過ぎるばかりでした。父も気付いてはいたけれど、かかわる勇気がありませんでした。

そこへ一人の女性がその人に近づくと、しゃがんで目線を合わせて、何度も何度も聞き返しながら笑顔でその人の話に耳を傾けていたそうです。親切なその女性は、その人がトイレに行きたいということを理解したようで駅員さんに声をかけ、トイレに案内する途中で家族の方に会えたらしく、父もほっとしたそうです。父は、その女性の勇気と思いやりの心に胸が熱くなったそうです。

僕も、ここまで話を聞き、その女性の心の美しさを感じ、とても美しい人を想像し、心があたたかくなりました。

父は、その時自分が何もできなかったことをとても後悔したそうです。僕も、父の話を聞き、その時の女性のように困っている人に自然に手をさしのべることができる優しい人になりたいと思いました。

そして、最後に父は僕におしえてくれました。その時の女性が、今、僕の母であることを。

あの海

いわき市立小名浜第一中学校
三年　太　雪乃

私は海が好きだ。晴れた日の静かな海はもちろん、雨の日の荒波の海も好きだ。季節によって表情を変えて、空の色が似合う海が私は大好きだ。

私の家はかつて海のすぐとなりにあり、窓からは海が見えた。海とともに小学生時代を過ごした。あの時、毎日聴いていた波の音は今でも思い出す。みんな、海とともに生活していた。あの日、その海が恐怖となるまでは。

あの日以来、その恐怖を経験した誰もが、もう海なんて見たくないと思っただろう。その海に、家も庭もごく普通の生活も奪われてしまった私と家族も同じだった。誰がやったわけでもない悲しみを怒りをどこへぶつければいいのかもわからない。私たちは、海を美しいと思うことも忘れてしまった。

「海を見ると、あの時を思い出す。もう怖くて海を見ることができない。」

父も母も言っていた。

私は昨年、地元ではなかったが市内のある海を見た。砂浜で海を眺めたのは震災後初めてのことだった。恐怖も何も感じなかった。

ふと昔の海を思い出し、やはり海は美しいなと思った。私は海を嫌いにはなれないんだな、とも思った。

時々、前の家があった所に行くことがある。海を嫌っていた母が、

「窓から見える海、きれいだったのにね。」

とつぶやいた。

悲しみは時間の流れが解決するという。私は、解決するきっかけの一つは思い出だと思う。私の、海が好きだという気持ちを取り戻してくれたのは、確かに私の思い出の中にあった海なのである。思い出すことを避けていては、海はいつまでも恐怖のままだ。そっと目を閉じてみてほしい。そうすれば、どこかで海を美しいと感じる自分に出会える。そして、きっとまた、海を好きになる。

親切料

白河市立表郷中学校
一年　中畑　萌々子

そこは、優しそうなお兄さんが焼き鳥を焼いているお店の前でした。いいにおいにさそわれ、姉と私が並んでいると、むこうから一人で大きなリュックを背負い、登山ぐつのようなくつをはいた外国人のきれいな女性が歩いてきました。

「これ。」

と文字が読めずに困っていた様子なので、私達はお兄さんに彼女が指さしている物を伝えました。すると、

「アリガト。私、日本人ジャナイカラ少シシカシャベレナイ。ハズカシイ。」

とかわいいしゃべり方で言いました。彼女は一人で日本に来たらしく道がわからないと、駅への道を聞かれました。するとお兄さんが、

「絵は上手？これに上手にかいてあげて。」

と白い紙とペンを私達にたくしました。私は説明が下手でしたが、紙に一生けん命書きました。

彼女は「アイガト。」と言って紙と焼き鳥の袋を持ち、ニコニコ笑顔で歩いて行きました。

お兄さんは私達に焼き鳥をわたすと、

「五百円でいいよ。親切料。おれここの出身じゃないから道わからないんだよ。助かった。」

と言ってくれました。

私達は、

「大丈夫です。」

と言って代金を支払いましたが、その言葉がとてもうれしかったです。

母に話すと、車で送ってあげればよかったねと言いましたが、すでに彼女の姿はありませんでした。無事に駅に着いたことを願いながら、私達は焼き鳥をほおばりながら笑顔で家に帰りました。

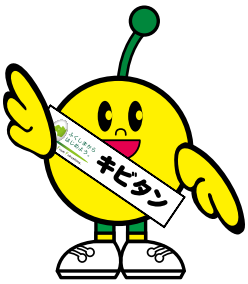
ふくしま道徳教育資料集【中学校版】

平成29年２月　福島県教育委員会

〒960-8688　福島県福島市杉妻町２－16

印刷　有限会社　吾 妻 印 刷

道徳教育総合支援事業（文部科学省）により制作しました。



福島県教育委員会

http://www.gimu.fks.ed.jp/（義務教育課）

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。